

● ● 成 果

大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム 多次元的な学士力養成を担う総合的学修支援

2-1 実績報告

事業の概要

本事業は本学の人材養成目標にそくし、高度な専門知性に裏づけられた研究力と幅広い見識をもち多様な職業領域に通じる総合力という2つの力能を両翼にして、そのあいだに展開される学生個々の特性と志向性に応じた多次元的な学士力の養成を担う教育推進プログラムとして実施するものである。そのために(1)開講全科目にカラーコードベンチマークシステムを導入し、学士課程全体に展開する幅の広い学びのパスを保証する複数プログラム選択履修型カリキュラムへの改編、(2)ファンクショナル GPA 制度の導入による厳格な成績評価の実施と教育成果の質保証を明確にする仕組みの開発と運用、(3)以上のあらたな施策で生じる多様な学修のあり方を適切にガイドしていくきめ細やかな学修支援体制（組織＋情報基盤）の構築と稼働を実現していく。これら新機軸の教育開発成果を一体運用することで、一層効果的、確実な教育の質保証を推進する。

学生教育の観点からみた当事業の目的と必要性

当事業の全体の目的は学士課程教育に多次元的な学修プロセスを構築し、アカデミックキャリア形成における多様性を生成、確保し、それを現実化、活性化する学修支援体制を開発、運用することである。そのために具体的にはカラーコードベンチマークシステム、十分に機能する GPA、全学共通利用の総合学修支援センターという3つの開発施策を適用することで、あらたな教育の質保証の仕組みを伴ったかたちで当事業の目的を実現する。

2-1-1 平成21年度実績報告

(1) この年度の事業の目的・必要性

当事業の平成21年度の目的は、上記の3施策の開発にあたることであった。そのために、23年度から実施する本学の学士課程カリキュラムの根幹をなす複数プログラム選択履修制度の具体案を確定すること、それに適合したカラーコードベンチマークシステムを設計すること、ファンクショナル GPA 制度の全体を構築し、導入のための検証シミュレーションを実施すること、総合学修支援センターの組織体制と運用計画を策定すること、同センターの情報インフラになる学修支援情報システムのハードウェアをセットし、ソフトウェア開発にあたること、本事業全体の遂行に資するための教育の質保証にかかわる事例調査を外部の教育機関に対して実施すること、本事業の公表と他機関協同の機会形成のため第一回公開シンポジウムを開催することがこの年度の事業目的となった。

(2) 平成21年度の事業実施計画

平成21年度の事業は、選定された多次元的な学士力養成を担う総合的な学修支援プログラム3年計画の全体スケジュールにおけるPDCAのPおよび開発過程に相当した。多様な人材養成課題に対応した複数プログラム選択履修制度による多彩なアカデミックキャリア形成の促進と、それに伴って必要となる多元的な学修成果の評価法や厳格な成績評価に裏づけられた教育の質の一層の充実・発展を目指す当事業実施のための基盤となる作業を進めることが主眼で。その実施計画はつぎのとおりであった。

- ① 10月 カラーコードベンチマークシステムの導入と複数プログラム選択履修制度のもとでのカリキュラム再編の方針を策定。そのうえで各部局で実施に向けての検討を開始
- ② 11月 年間修得可能単位数の上限にかかわる検討とファンクショナル GPA 制度の開発と導入計画を策定
- ③ 11月 総合学修支援情報システムのためのハードウェアセッティングをおこないソフトウェア開発に着手。ここには本事業の全体を公開し、情報発信をしていくためのウェブサイト制作も含まれる
- ④ 11月 2月に開催する公開シンポジウムの企画と準備を開始。あわせて教育の質保証に関する情報収集活動として、類似の事業をおこなっている国内諸教育機関の実態調査を実施
- ⑤ 12月 GPA を学修支援に活用した場合のシミュレーションと新たな成績証明のあり方についての検討作業を開始
- ⑥ 1月 総合学修支援センターの組織計画と運用計画を策定。支援・訓練プログラムの各立案を開始
- ⑦ 2月 大学教育推進プログラム第1回公開シンポジウムを開催し、その全体をウェブで公開と報告書を作成
- ⑧ 2月 公開シンポジウムの成果測定を中心に当事業全体に対する理解の程度を把握するための学内ア

ンケートを実施

- ⑨ 3 月 本事業目的のバックボーンとなる教育の質保証に関する情報収集のため韓国の諸大学の実態調査を実施

(3) 事業内容

平成 21 年度の事業内容は以下のとおりであった。

- ① 当事業を立ち上げ、推進していくため大学教育推進プログラムプロジェクトチーム（以下、PT と略）を編成し活動を開始、そのもとでカラーコードベンチマークシステムの導入と複数プログラム選択履修制度のもとでのカリキュラム再編の方針を確定。それを受けて各部局でカリキュラムの見直しを開始。
- ② 教育開発センターが中心となり、現況にそくした年間修得可能単位数の上限にかかわる検討をおこない、ファンクショナル GPA 制度の開発と導入計画を策定。
- ③ カラーコードベンチマークシステム、複数プログラム選択履修型カリキュラム、ファンクショナル GPA の新施策を連携させつつ、きめ細やかな学修支援を実現するためのインフラとなる学修支援情報システムのためのハードウェアセッティングをおこないソフトウェアの開発に着手。ここには本事業の全体と進捗状況を公開し、学外とのコミュニケーション通路を開くウェブサイトの制作も含まれる。これらをセンター専任教員 1 名、アカデミックアシスタント 1 名、および今期スポット情報処理補助員 1 名、同じく今期スポット契約エンジニア 1 名の体制で開始。
- ④ 2 月に開催する公開シンポジウムの企画と準備を開始。ベンチマーク、多次元的な学士力養成、きめ細かな学修支援、機能する GPA、教育の質保証といった本事業のメインテーマに則して情報交換と発展的な討議成果が期待できそうな国内諸機関の関係者とシンポジウム参加交渉をおこないつつ実態調査をし、そのプロセスをつうじて本学における事業の一層の改善に反映させる。
- ⑤ 教育開発センターにおいて、GPA の値を学修支援に活用した場合のシミュレーションを開始。本事業の目指す教育の質保証を明確にした新しい成績証明の具体的なありかたを検討し、デザイン開発に着手。
- ⑥ PT、全学教育システム改革推進本部、教育開発センターが連携し、総合学修支援センターの組織計画と運用計画を策定。同時に支援・訓練プログラムの各立案を開始。上記のセンター内計画のプロジェクト管理担当として、学修支援特任のリサーチフェロー 2 名、アカデミックアシスタント 2 名を PT に加え、総合学修支援センターの設置（翌年度はじめに計画）に向けての準備活動を開始。

- ⑦ 大学教育推進プログラム第一回公開シンポジウムを開催。同シンポジウムは本事業の対外的な広報、他大学との今後の協同関係構築を図るためのものであった。また同時に、学内的には当事業の全体計画を学内に周知し、全学的な協力体制を形成していくための FD 活動の一環として実施。シンポジウムの全体は本事業のウェブ上で公開し、報告書を作成。
- ⑧ 公開シンポジウムの成果測定を中心に当事業全体に対する理解の程度を把握し、今後の展開のための意見聴取をおこなうための学内の教員・事務・学生（無作為一部）を対象とした第一回アンケートを実施する。同様のアンケートは当事業の周知チェックであると同時に周知活動そのものとしての機能ももつため、事業期間をつうじて 5 回実施する予定である。
- ⑨ 本事業目的のバックボーンである「教育の質保証」に関する国外事例の情報収集活動として、韓国の大学における当該課題の実態調査を実施。質保証の国際標準に関する考え方を共有すると共に、その結果を本学における事業のさらなる改善に反映させる（なお、当初海外調査は米国を予定していたが、本年度、教育開発センターにおいて GPA 制度に関する広域の国際調査を実施した結果、現在および今後の日本の大学教育推進にとっては米国よりも韓国の大学に関する実態確認の必要性、有用性の方がより大きいと判断された）。
- これらを通じて、本事業のさらなる充実・発展を図り、高度な専門知性に裏づけられた研究力の養成と、幅広い見識をもち多様な職業領域に通じる総合力の涵養という本学の教育目的に沿って、そのあいだに展開される学生個々の特性と志向性に応じた多次元的な学士力の養成を実現する教育推進プログラムによる人材養成機能を強化。

(4) 学内合意形成過程

平成 21 年度に本事業の推進と学内合意形成のために開催された会議と、そこでの主たる関連議題はつぎのとおりであった。なお、本事業関連の議題について取りあげているため会議によっては開催回数必ずしも連番になっていない場合がある。

平成 21 年 4 月 28 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 1 回）で教育開発センター規則、体制について検討

平成 21 年 5 月 25 日 教育改革部会（第 1 回）で複数プログラム選択履修制度とその実施開始時期、GPA 制度とカラーコードベンチマークシステム導入について検討

平成 21 年 6 月 17 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 2 回）で複数プログラム選択履修制度の導入時期について検討

平成 21 年 6 月 24 日 教育改革部会（第 2 回）で複数プログラム選択履修制度のあり方と実施開始時期、GPA 制度とカラーコードベンチマークシステムの内容と導入スケジュールについて検討

平成 21 年 7 月 24 日 教育改革部会（第 3 回）で複数プログラム選択履修制度のプログラム特性の確

認と課題、精査について検討

- 平成 21 年 9 月 1 日 教育改革事項を効率的に検討、推進するために「教育改革推進ワーキングプロジェクトチーム」を発足
- 平成 21 年 10 月 15 日 教育改革部会（第 4 回）で複数プログラム選択履修制度のプログラム精査と見直し、GPA 制度とカラーコードベンチマークシステムについての全学説明会、大学教育推進プログラムの申請にかかわる検討
- 平成 21 年 10 月 16 日 fGPA 制度、カラーコードベンチマークシステムに関する 3 学部長向け説明会を実施
- 平成 21 年 11 月 25 日 複数プログラム選択履修制度・総合的な学修支援、fGPA 制度、カラーコードベンチマークシステムに関する全学説明会を実施
- 平成 21 年 11 月 25 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議で各学部へのプログラム修正（第 4 次案）依頼内容を検討
- 平成 21 年 12 月 7 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議で複数プログラム選択履修制度の大綱案を検討
- 平成 21 年 12 月 7 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議で複数プログラム選択履修制度の大綱案を検討
- 平成 21 年 12 月 14 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議で履修ガイドの改訂について検討
- 平成 22 年 1 月 27 日 教育改革部会（第 6 回）で複数プログラム選択履修制度の導入についての調整確認と各学部のプログラム案を検討
- 平成 22 年 2 月 18 日 教育改革部会（第 7 回）で複数プログラム選択履修制度において選択可能なプログラムの指定、同制度大綱、卒業証明、成績証明書などの様式変更を検討
- 平成 22 年 3 月 2 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 3 回）で複数プログラム選択履修制度の大綱を審議検討
- 平成 22 年 3 月 17 日 教育改革部会（第 8 回）で複数プログラム選択履修制度において選択可能なプログラムの指定、導入に伴う作業計画、履修シミュレーション調査設計、学修指導の原則と体制などを検討

(5) 具体的な事業成果

平成 21 年度の事業の具体的な成果はつぎのとおりであった。

- (1) 全学的に実施する複数プログラム選択履修制度のカリキュラム案と具体的な時間割の素案を作成するに至った。これにより学生はこれまで以上に個々のアカデミックキャリア形成を意識化し、個々人の関心と志向性にそくした学びの実現を図れるようになると期待できる。その点を事前検証するための学生モニターによる履修シミュレーション調査の実施準備を整えることができた。
- (2) 複数プログラム選択履修制度のもとで学生が最大限に教育の達成目標をクリアし、質の高い充実し

た学びを果たしていける仕組みづくりとして、カリキュラムに対するカラーコードベンチマークシステムを設計し、成績評価制度としてのファンクショナル GPA 制度の全体案を構築した。そのうえで全学にわたる説明と同意を得る作業を実施し、既存の教学システムへの具体的な組み込み作業を完了した。

- (3) 新施策のもとでの修学支援を支える総合学修支援センターの組織体制と運用計画を策定し、学生に対するきめ細やかな対面学修支援サービスの実現と、学生がみずからの学修状況や履修科目に関する各種情報をいつでも必要に応じてチェックし、即応していける仕組みづくりとしてその情報基盤システムのハードウェアのセッティングを完了した。また、そのもとでのソフトウェア開発に着手した。
- (4) 本事業全体の遂行に資するための教育の質保証と学生にとっての学修環境の改善という観点から国内事例調査を北海道大学、京都大学、広島大学、九州大学に対して実施した。また、国外については欧米豪州アジアの 1000 大学に対して成績評価制度の現状を中心とした質問紙調査を実施し、311 大学からの回答を得て、その分析を施し、報告書、学会、講演等の機会をつうじてその結果を公表することができた。本報告書 3-2 にも再録した。
- (5) 本事業の公表と他機関協同の機会形成のため第一回公開シンポジウム「教育の質保証 — 4 つの大学の事業から」を 2010 年 2 月 13 日に開催し、本学の事業紹介・報告を含めて国内 4 大学の報告とディスカッション、情報交換をおこなった。入試時期に重なったものの北は北海道、南は鹿児島まで 43 機関から 63 名の参加者を得て盛会のうちに終えることができた。この成果は独立の報告書のほか、ウェブをつうじて公表した。本報告書 3-6 にも再録した。なお、当事業の計画や関連ニュース、成果、進捗状況はインターネットのウェブをつうじて随時、更新公開した。

2-1-2 平成22年度実績報告

(1) この年度の事業の目的・必要性

この事業の平成22年度の目的は、日常の学生教育に密着した3施策の継続開発と、当事業最終年度での導入・稼働に向けた試行、検証と演習、関連FDを実施することであった。具体的には、平成23年度から実施するカラーコードベンチマークシステムを含んだ複数プログラム選択履修制度の確定と成績評価制度にファンクショナル GPA 制度を組み込むこと、およびそれらの導入のための検証シミュレーション、新体制の学内周知活動の実施であった。また、同時に稼働していく総合学修支援センターの組織体制を整備・確立し、運用計画に沿って実働の演習を実施した。同センターの情報インフラにもなる学修支援情報システムについてはひきつづきソフトウェアの開発とランニングテスト、実働システムの決定にあたる必要もあった。当事業推進の全体をつうじて、その作業の各相の透明化を図り、成果が適切に浸透するよう全学的なFD実践への連係に配慮し、システムを介した情報発信はもとより、授業・学習支援システムの研究会を定期的に実施していくことも必要であった。

(2) 平成22年度の事業実施計画

平成22年度の事業は、選定された多角的な学士力養成を担う総合的な学修支援プログラム3年計画の中間年度、PDCAのPlanのあと、そのDoとCheckのプロセスにあたった。ただし、この年度の事業はカリキュラムや成績評価制度という日常の大学教育の基幹システムにかかわることがらであったため、そのDoは同年度の学務と並行稼働させるモデルでのシミュレーションと検証になった。実施計画はつぎのとおりであった。

- ① 4月 学士課程専門教育の根幹をなす複数プログラム選択履修制度とカラーコードベンチマークシステムの構築実務作業を開始する。
- ② 4月 学士課程教育の達成評価を担うファンクショナル GPA 制度のシステム組み込みとテストラン、検証を開始する。
- ③ 5月 日々の学生教育をサポートする総合学修支援センターを本格設置し、試験運用を開始する。
- ④ 6月 総合学修支援センターの支援業務訓練・演習を開始する。
- ⑤ 7月 学生教育に密着した当事業の推進に関連する学内研究会を実施する。
- ⑥ 8月 学修支援情報システムのテストランを開始する。
- ⑦ 10月 学修支援情報システムの学生利用携帯端末でのモニタリングを開始する。
- ⑧ 10月 総合学修支援センターの支援業務のテストランを開始する。
- ⑨ 1月 複数プログラム選択履修制度とカラーコードベンチマークシステム、fGPA システムの構築実務作業を完了させる。

(3) 事業内容

平成 22 年度の事業内容は以下のとおりであった。

- ① 複数プログラム選択履修制度の具体的な実施計画の策定にとりかかり、それに適合したカラーコードベンチマークシステムの組み込み作業を開始。

複数プログラム選択履修制度は学士課程高年次カリキュラムの全面リニューアルとして導入されるものであり、これによって各学部・学科の専門領域の強化、領域をまたがった学際、あるいは所属専門とは異質な領域の学問を副専攻的に履修するなど、多種多様な学生の志向、要求に適合した多次元的な学士力養成の教育効果が果たされていくことになる。結果として学生の学修のあり方はこれまで以上に多彩化することになり、それを的確にサポートしていく体制が必須となる。カリキュラム上に構成されるカラーコードベンチマークシステムはそうした多様な学修のあり方をわかりやすく適切に導き、個々の学生の選択に最適化した教育効果をもたらすことになる。

- ② 教育開発センターが中心となり、ファンクショナル GPA 制度の全学教務システムへの組み込みをおこない、テストランと検証を実施。

ファンクショナル GPA 制度は学士課程における教育成果の質保証を担う基盤制度として機能する。これは厳格な成績評価の方針のもとで評定された原成績を忠実に一次変換してあらわされる fGPA とそれを用いた学修分析システムによって担われる。その全学教務システムへの組み込みとテストラン、従前の成績評価結果との比較検証をおこなうことで学生が修めた教育効果の成果証明にかかわるクオリティ・コントロールとクオリティ・マネジメントについて一層の充実と改善を図ることができる。

- ③ 総合学修支援センターを設置し、学修支援特任のリサーチフェロー 2 名を中心に、運用計画のもとでのシミュレーション運用と支援業務の演習計画の策定を開始。

総合学修支援センターは、本学で全学的にはじめて導入される複数プログラム選択履修制度や fGPA 制度による成績評価のプロセス評価などの新施策を適切に支援し、その円滑な運用と、学生に対する教育サービスを充実させるために設置される。そのシミュレーション運用と業務の演習計画の策定をつうじて、学生に対する教育効果を高めるためのサービス体制を確立する。これによって、学生は訓練された専任スタッフから複数プログラム選択履修制度における多次元的な学修に際して、全学的な観点から必要とする情報や案内、相談を必要に応じていつでも受けることができ、新カリキュラムが意図する学生ニーズに適合した学修による教育効果を盤石なものとする。

- ④ リサーチフェローのもとでアカデミックアシスタントや学生のアルバイトとともに総合学修支援センターの支援業務に関する訓練・演習に着手。

総合学修支援センターの支援業務に関する訓練・演習を重ね、学生に対するきめ細やかな対面学修支援・相談サービスの実践を修練する。これにより、学生に対する教育支援効果を確実なものにする。また、支援情報システムの仮想運用をつうじて情報システムを介した支援業務の成果を現実的なもの

になすべくその習熟を図る。

- ⑤ 学内の教職員・学生を対象に当事業の実施内容に関する周知と 24 時間学内外から利用できる授業・学習支援システムの学内研究会を実施。

学内周知により、当事業における学修支援体制や成績評価制度、ベンチマーク制度についての理解を促す。また、授業・学習支援システムの学内研究会を実施し、学生に対するプログラム毎の教育効果を念頭においたテーマでの FD 活動として展開する。

- ⑥ 総合学修支援情報システムのうち、成績評価に関わる新入力方法、ウェブ表示機能、成績分析機能、成績証明機能、さらに授業支援システムのうち、レポート提出、授業資料配付、授業連絡（ブログ）、授業コミュニティ機能などのテストランを開始。

後者のシステムについてはオリジナル開発のものと複数の既存候補システムを同時に併用しながら、とくにユーザビリティやシステム運用面での比較検討をおこなう。総合学修支援情報システムのうち、成績評価に関わる諸機能は学生にとっては学士課程の全期間をつうじて学業の細かな学修成果査定をみずからチェックすることを可能にする。これにより戸惑いも多々あるであろうプログラム選択履修の際の意思決定に効果をもたらすことになる。また、授業支援システムは、レポート提出、授業資料配付、授業連絡（ブログ）、授業コミュニティ機能などのラーニングマネジメントシステムとして日常的に学生に対する学習支援効果をもたらす。しかも当事業ではこのシステムについて、少なくとも 3 つのシステムを同時に併用し、学生によるモニタリングをつうじてユーザビリティや運用面での比較評価を実証的に検証したうえで選定する。したがって、学生にとって最大限に現実的な効能をあげうる方法を決定できる。

- ⑦ 総合学修支援情報システムの携帯端末でのモニタリングを開始。

後期授業からテスト的に複数の授業で授業支援システムのテストランに参加してもらいながら、ユーザビリティの検証をおこなうが、学生には Wi-Fi によるノート PC、PDA、スマートフォンの 3 通りほどの携帯端末により、利便性、操作性などの観点での調査を実施する。総合学修支援情報システムで学生が日常的な用いる端末にはユビキタス性と運用上の実効性という観点からモバイル端末を用いる。そのハードウェアについてもモニタリング調査をおこない、ノート PC とパッド型端末 2 通りほどのターミナルについて利便性、操作性などの観点から比較検討を重ね、その実証データをもとに本格稼働の際の選択基準や推奨機器を明確にする。

このプロセスにより学生が総合学修支援情報システムを利用して、日々の学習をおこなうにあたっての学習指針を得ることや、ウェブをつうじた諸資料の配布やレポート提出・小テストの実施などにもとづく授業時間外学習の具体的な実施やその動機づけの発揚、あるいはクラスとは別の学習コミュニティの形成などにより、教育・学習機会の柔軟な拡張を可能にし、単位の実質化による密度の高い教育効果があげられるようにする。

- ⑧ 総合学修支援センターの支援業務を後期授業を利用して試験運用。

この支援業務は学修に関する相談や授業支援システムの活用法の相談が主体になる。総合学修支援センターの支援業務を後期の授業期間にテストランすることで、次年度の本格実施に際して学生が滞りのない十全な学修支援サービスを受けられるように図る。これにより学生は新学期からきめ細やかな対面学修支援・相談サービスおよびモニター検証をつうじて最適化された学習マネジメントシステムの利用をスムーズに享受することができ、人的・システムの充実した学習環境のもとでそれぞれに選択した学習パスにそくした学業に勤しみ、その教育効果をあげられるようにする。

- ⑨ 複数プログラム選択履修制度とカラーコードベンチマークシステム、fGPA システムの構築実務の最終調整を実施し、作業を完了。

複数プログラム選択履修制度、それを支えるカラーコードベンチマークシステムと fGPA システムの構築実務と相互関連の最終調整をおこなう。これにより 4 月から新カリキュラムの実施にあたり、学生はカラーコードによる指針を得つつ、主・強化・副・学際のカテゴリー化されたプログラム単位の履修計画を立て、そのプランに沿った学習をおこない、その成果を適正に評価する fGPA システムにもとづく教育効果・成果の質保証が担保されることになる。

(4) 学内合意形成過程

平成 22 年度に本事業の推進と学内合意形成のために開催された会議と、そこでの主たる関連議題はつぎのとおりであった。なお、本事業関連の議題について取りあげているため、会議によっては開催回数が必ずしも連番になっていない場合がある。

平成 22 年 4 月 8 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 1 回）で学生主体の新しい学士課程の創成について年間計画、履修シミュレーション調査について検討

平成 22 年 4 月 15 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 2 回）で複数プログラム選択履修制度で選択可能なプログラムの指定、学習指導の原則と体制、複数プログラム選択履修制度履修シミュレーション調査について検討

平成 22 年 4 月 21 日 教育改革部会（第 1 回）で複数プログラム選択履修制度で選択可能なプログラムの指定、学習指導の原則と体制、履修シミュレーション調査などについて検討

平成 22 年 5 月 13 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 3 回）で複数プログラム選択履修制度における選択可能プログラムの指定、カラーコードベンチマークの設定基準、履修シミュレーション調査について検討

平成 22 年 5 月 20 日 教育改革部会（第 2 回）で複数プログラム選択履修制度における選択可能プログラムの指定、カラーコードベンチマークの設定基準、履修シミュレーション調査について検討

平成 22 年 6 月 3 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 4 回）で履修規程別表の作成、カラーコードベンチマークの記載基準、複数プログラム選択履修シミュレーション調査の結果などについて

検討

平成 22 年 6 月 14 日 教育改革部会（第 3 回）で複数プログラム選択履修制度における申し合わせ事項の確認、カラーコードベンチマークの設定基準、履修シミュレーション調査の結果について検討

平成 22 年 6 月 18 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 6 回）で複数プログラム選択履修シミュレーション調査の結果、総合学修支援センターにおける学修指導の原則と体制についての案、学務情報システム、複数プログラム選択履修制度案内版フレットなどについて検討

平成 22 年 7 月 9 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 8 回）で複数プログラム選択履修シミュレーション調査の結果、総合学修支援センター、GPA 指標の活用法、カラーコードベンチマークの記載基準などについて検討

平成 22 年 7 月 14 日 教育改革部会（第 4 回）で学修指導の原則と体制大綱、学芸員課程の副プログラム案、複数プログラム選択履修シミュレーション調査の結果、総合学修支援センター、成績評価・GPA 指標の活用法、学務情報システムなどについて検討

平成 22 年 7 月 21 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 2 回）で学修指導の原則と体制大綱、総合学修支援センター規則の制定、複数プログラム選択履修専門部会の内規などについて検討

平成 22 年 8 月 2 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 9 回）で複数プログラム選択規則、学務情報システムなどについて検討

平成 22 年 8 月 27 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 10 回）で複数プログラム案の修正、カラーコードベンチマーク表、成績評価・GPA の活用法、関連する履修規程の見直し、学務情報システムなどについて検討

平成 22 年 8 月 27 日 学務部会会議（第 3 回）で学修指導の原則と体制大綱、複数プログラム選択履修専門部会の設置、総合学修支援センター案などについて検討

平成 22 年 9 月 1 日 教育改革部会（第 5 回）で複数プログラム案の修正、カラーコードベンチマーク表、成績評価・GPA の活用方法、関連する履修規程の見直し、学務情報システムなどについて検討

平成 22 年 9 月 16 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 11 回）で教育プログラム規則、学部の履修規程、履修ガイドの作成、プログラム名の変更、学務情報システムなどについて検討

平成 22 年 9 月 24 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 12 回）で教育プログラム規則、成績通知票・証明書の様式、履修ガイドの作成、GPA 制度に関する要項と学生への説明文、成績評価・fGPA に関する意見、学務情報システムなどについて検討

平成 22 年 9 月 28 日 教育改革部会（第 6 回）で複数プログラム選択履修制度実施規則、学部の履修規程、成績通知票・証明書の様式、GPA 制度に関する要項と学生への説明文、成績評価・fGPA に関する意見、プログラム名の変更、学修指導の原則と体制案などについて検討

平成 22 年 9 月 30 日 教育開発センター会議（第 2 回）で大学教育推進プログラムの実施状況、総合学修支援センターの設置などについて検討

平成 22 年 10 月 8 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 13 回）で学務情報システム、各学部の履修規程、学修指導の原則と体制大綱案、成績評価・fGPA に関する意見、履修ガイドの作成などについて検討

平成 22 年 10 月 18 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 14 回）で複数プログラム案の修正、

カラーコードベンチマーク表、GPA 制度に関する要項、各学部の履修規程、学修指導の原則と体制大綱案、複数プログラム選択履修制度導入に伴うカリキュラムの精査、平成 23 年度カリキュラム改訂などについて検討

平成 22 年 10 月 19 日 教育改革部会（第 7 回）で複数プログラム案の修正、カラーコードベンチマーク表、各学部の履修規程、学修指導の原則と体制大綱案、複数プログラム選択履修制度導入に伴うカリキュラムの精査などについて検討

平成 22 年 11 月 10 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 16 回）で総合学修支援センター設置に伴う諸規程の一部改正、総合学修支援センターの設置、GPA 制度に関する要項について検討

平成 22 年 11 月 16 日 教育改革部会（第 8 回）で総合学修支援センター設置に伴う諸規程の一部改正、総合学修支援センターの設置、GPA 制度に関する要項などについて検討

平成 22 年 11 月 24 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 17 回）で GPA 制度に関する要項、履修ガイドの作成について検討

平成 22 年 12 月 1 日 教育改革部会（第 9 回）で GPA 制度に関する要項、総合学修支援センター規則、学修指導の原則と体制大綱案、履修ガイドの作成などについて検討

平成 22 年 12 月 1 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 3 回）で総合学修支援センター設置に伴う諸規程の一部改正、教育企画室設置諸規程の一部改正、学修指導の原則と体制大綱案、GPA 制度に関する要項、平成 23 年度からの成績評価の仕方と GPA 制度、成績証明書・成績通知票の新様式などについて検討

平成 22 年 12 月 17 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 18 回）で各学部の履修規程の一部改正、平成 23 年度の各学部の履修プログラム案、2 つの副プログラムの統合案、平成 23 年度からの成績評価の仕方と GPA 制度、成績証明書・成績通知票の新様式、学士課程案内冊子案について検討

平成 22 年 12 月 20 日 学務部会（第 5 回）で複数プログラム選択履修制度実施規則、各学部の履修規程の一部改正、GPA 制度に関する要項などについて検討

平成 22 年 12 月 21 日 教育改革部会（第 10 回）で各学部の履修規程の一部改正、平成 23 年度の各学部の履修プログラム案について検討

平成 22 年 12 月 22 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 4 回）で複数プログラム選択履修制度実施規則、各学部履修規程の一部改正などについて検討

平成 23 年 1 月 20 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 19 回）で平成 23 年度の各学部の履修プログラムと履修規程の一部改正について検討

平成 23 年 1 月 25 日 教育改革部会（第 11 回）で各学部の履修規程の一部改正、平成 23 年度の各学部の履修プログラム案、平成 23 年度からの成績評価の仕方と GPA 制度、成績証明書・成績通知票、学士課程案内冊子について検討

平成 23 年 2 月 9 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 20 回）で学務情報システム、成績証明書・成績通知票様式、学士課程案内冊子、履修ガイドなどについて検討

平成 23 年 2 月 15 日 全学教育システム改革推進本部会議（第 5 回）で学務情報システム、学士課程パンフレット、平成 23 年度履修規程、23 年度からの成績評価の仕方と GPA 制度、成績証明書・成

績通知票の新様式などについて検討

平成 23 年 3 月 1 日 教育改革部会（第 12 回）で S 評価の上限ガイドライン設定の適用学年、成績証明書における主・強化プログラムの識別のあり方、履修ガイドの内容などについて検討

平成 23 年 3 月 11 日 教育改革推進ワーキングプロジェクト会議（第 21 回）で新学務情報システムの操作、履修ガイドなどについて検討

平成 23 年 3 月 11 日 複数プログラム選択履修専門部会会議および総合学修支援センタ会議（第 1 回）で新学務情報システムの操作、履修ガイドなどについて検討

(5) 具体的な事業成果

平成 22 年度の事業の具体的な成果はつぎのとおりであった。

- ① 教育改革推進ワーキンググループと全学教育改革推進本部のもとで、全学各部局との調整を図りながら、次年度から運用する複数プログラム選択履修制度の具体的な実施計画の策定と、それに適合したカラーコードベンチマークシステムの組み込み作業をおこなった。これにより学生の幅広い関心にもとづく主体的な学士力養成を実現していくための新カリキュラムとその学修の体制を整えることができた。
- ② 教育開発センターが中心となり、ファンクショナル GPA 制度の全学教務システムへの組み込みをおこない、テストランと検証を実施した。これにより、次年度からの学士課程教育で実施するあたらしい厳格な成績評価制度の実施と、学生にとっての教育の質保証に向けたあらたな取り組みを実現するための基盤が完成した。
- ③ 総合学修支援センターを設置し、学修支援特任のリサーチフェローを中心に、運用計画と支援業務の演習計画の策定をおこなった。これにより学生が自分の所属する学部や専門領域を越えた幅広い学修を効果的に進めていくための相談と支援サービスの体制を構築することができた。
- ④ リサーチフェローと大学院生からなるアカデミックアシスタントによって総合学修支援センターの支援業務に関する検討を進めた。これにより想定される複雑、多岐にわたる履修の可能性に応えると共に、可能であるはずの履修が時間割の制約上できない状態になっているところなどを学生に対する履修シミュレーション調査を実施してあきらかにし、その結果をもとに理念に適うかたちにカリキュラム調整を施し、学生の多様な学士力養成を実現していく複数プログラム選択履修制度の完成をみた。
- ⑤ 当事業の総合学修支援システムのひとつ、学習マネジメントシステム plone の開発と調整を継続的に実施し、学生の授業時間外学習を学内外で実質的に確保するシステムを確立した。また、その運用と利用に関連した学内教員への聞き取り調査を実施し、その結果をもとにテーマ設定をおこない学内研究会、説明会を実施することで、学生の学修の質を高めるための単位の実質化に向けた認識を共有

し、その具現化にむけての方向づけをおこなうことができた。

- ⑥ 総合学修支援情報システムのなかの授業支援システムのうち、オリジナル開発の LMS と 3 つの既存候補システム、plone、moodle およびキャリアレポート放送局を同時に併用しながら、とくにユーザビリティやシステム運用面での比較検討をおこなった。その結果、とくに学生が学外からでも常に高い安定性と信頼性のもとで利用でき、かつ運用面での経済的継続性において plone と moodle の優位性を判断することができ、これらを継続発展させていく目処をつけることができた。
- ⑦ 学生に後期授業から授業支援システムのテストランに参加してもらい、ノート PC、PDA (iPad、iPod touch)、スマートフォン (iPhone) の 4 通りの携帯端末により、利便性、操作性などの観点でのモニタリングを実施し、結果をヒアリング調査した。その結果、学内環境では WiFi の機能も使えてどのハードでも遜色のない利用が可能であることがわかったが、在宅や他の機関での利用になると通信条件の多様性や制約から PDA やスマートフォンでは十分な利用がままならないことが認められた。またレポートなどの文書作成との連動などの点でも当面の間はノート PC の優位性が明白であることが確認できた。この結果から、教育の質保証の文脈において確実な授業支援を実現していくためのハードウェア環境を明確にでき、学生にとっての最適な授業支援環境をあきらかにすることができた。
- ⑧ 複数プログラム選択履修制度とカラーコードベンチマークシステム、fGPA システムの構築実務の最終調整をおこない作業を完了させた。これにより学生の多次元的な学士力養成を担うためのベンチマークつきの新カリキュラムとプログラム履修制度、およびそのもとで学修動機づけの促進を図る新成績評価制度の履行が可能となった。
- ⑨ 授業支援システム Plone についてその活用促進のための学内研究会、説明会を 9 月より 4 回にわたり開催した。これにより授業資料の事前配付と集積、レポートや小テストの実施、ウェブ上でのディスカッションなどを可能にし、単位の実質化を具現化する授業時間外学習の手段を確立した。これにより学生にとってより密度の高い学修経験の実現に向けて大きく前進した。また、同システムのアンケート調査機能を利用した学内アンケート調査を 10 月にリベラルアーツ授業科目担当教員向けに実施、12 月に学生の意識調査について実施し、実施経費と集計労力を顕著に削減したうえで効率よく PDCA のチェック機能を働かせ、学生の視座に立った教育改善手続きを構成する方途を得ることができた。

2-1-3 平成23（最終）年度実績報告

(1) 当年度事業の目的・必要性

本事業の最終年度の目的は、日常の学生教育に密着した上記の3施策の導入と稼働、および運用とその検証をつうじての調整と改善を実施し、定着をはかりつつ教育に資する関連FDを実施することであった。具体的には、本年度から実施するカラーコードベンチマークシステムを含んだ複数プログラム選択履修制度の履行と、ファンクショナル GPA 制度を組み込んだ新たな成績評価制度を運用し検証。また、同時に稼働していく総合学修支援センターの適正運用をはかり、同センターにおける実務と学生自身が利用する情報インフラになる学修成績情報ネットワークシステムの開発と試験運用を経て、後期からの実働に向けて準備することであった。

さらに、必要に応じて本事業全体の遂行に資するための教育の質保証にかかわる事例調査を諸教育機関に対して実施。本事業推進の全体をつうじて、作業各相の透明化を図り、成果が適切に浸透するよう全学的なFD実践への連係に配慮し、システムを介した情報発信はもとより、学内アンケートや研究会を適宜実施していくことも必要とされた。また、本年度後半には本事業の最終的な成果報告書をまとめ、その評価と成果を踏まえ、今後の展開につなげることを狙いにした大学教育推進プログラム第2回公開シンポジウムを企画し、実施することもこの年度の事業目的におかれた。

(2) 平成23（最終）年度の事業実施計画

平成23年度の事業は、3年計画の最終年度、PDCAサイクルのDoとCheckを引き継ぎ、そのDoとCheckの継続および改善を前提としたActのプロセスにあたった。また、最終年度に鑑み、事業全体の成果に対する検証、評価と報告の業務も加わった。その実施計画はつぎのとおりであった。

- ① 4月 学士課程専門教育の根幹をなすカラーコードベンチマークシステムを含んだ複数プログラム選択履修制度を実働させる。また、教育の達成評価を担うファンクショナル GPA 制度を新1年次生から学年進行で実働させる。
- ② 4月 日々の学生の教育をサポートする総合学修支援センターを稼働させる。総合学修支援センター業務のOJTとともに、利用者への聴き取り調査を準備し実施する。
- ③ 5月 教育に密着した学修情報ネットワークシステム上で同システムの学生によるモニター試用を開始し、逐次、システムの改善にあたる。
- ④ 8月 前期における総合学修支援センターの支援業務検証を学生アンケート調査により実施する。その検証をつうじて同センターの支援業務の調整と改善にあたる。
- ⑤ 9月 fGPAシステムによる学修評価を算定し、分析と情報ネットワークシステムへの展開をおこなう。後期からシステムを本格稼働させる。

- ⑥ 11月 当事業の評価と成果を踏まえた今後の展開をはかる公開シンポジウムの企画立案にあたる。
- ⑦ 1月 教育に密着した学修情報ネットワークシステムなど学修支援の検証にあたるため学生アンケート調査を実施し改善にあたる。
- ⑧ 2月 当事業の評価と成果報告のための公開シンポジウムを実施し、当事業全体の成果報告書（本書）をまとめる。

(3) 事業内容

平成23年度の事業の内容は以下のとおりであった。

- ① 全学の各部局との調整を図りながら、学士課程専門教育の根幹をなすカラーコードベンチマークシステムを含んだ複数プログラム選択履修制度のもとでの新学期の授業を実施する。また、教務チームと教育開発センターの協働のもと、あらたに教育の達成評価を担うファンクショナル GPA 制度を新入生から学年進行で導入し稼働させる。

複数プログラム選択履修制度は学士課程の高年次カリキュラムの全面リニューアルとして導入される。これにより所属専門の主領域のほかに、第一に各学部・学科の専門領域の強化、第二に学問領域をまたがった学際、第三に所属専門とは異なる分野の学問を副専攻的に履修する方向性を制度的に開き、しかもそれぞれに一定程度まとまりのあるプログラム履修を可能にしつつ、多種多様な学生の志向、要求に適合した多次元的な学士力養成をはかる。

また、これまで以上に多彩化する学修のあり方をわかりやすく適切に導くために、カリキュラム全体にカラーコードベンチマークシステムを適用し、個々の学生の選択に最適化した教育効果をもたらすよう配慮した。ファンクショナル GPA 制度は教育成果の質保証を担う基盤制度として機能する。これは厳格な成績評価の方針のもとで評定された原成績を、そのまま一次変換してあらわされる fGPA によって運用され、下記に示すきめ細やかな学修状況分析と課程全期に適用されるプロセス評価を可能にしていく。

- ② 複数プログラム選択履修制度のもとでの学修などを適切に支援し、学生教育を総合的にサポートする総合学修支援センターにおいて、学修支援特任のリサーチフェローのほか、同センター規則にのっとりピアサポーターによる具体的な支援業務を開始し、同時にヒアリングによりサービスに関するモニタリングを設計し実施していく。

総合学修支援センターは、本学で全学的にはじめて導入される複数プログラム選択履修制度や fGPA 制度による成績評価のプロセス評価などの新施策を適切に支援し、その円滑な運用と、学生に対する教育サービスを一層充実させるために設置された。その業務を開始するとともに、専任スタッフやピアサポーターのオンザジョブトレーニングを並行し、学生に対する教育効果を高めるためのサービス体制を確立する。これによって複数プログラム選択履修制度における多次元的な学修に際して、全学的な観点から必要とする情報や案内、相談に対応し、新カリキュラムが意図する学生ニーズに適合した学修による教育効果の発揮を確実なものとする。また、そのために業務進行とともに利用

者に対するヒアリング調査をデザインし実施していき、サービス内容の改善サイクルを形成する。

- ③ 学生教育に密着した学修情報ネットワークシステムをネットワーク上で稼働させ、学生によるモニター試用を募り、試験運用を開始する。そのモニタリング報告を受けながら、逐次、システムの改善にあたり、学生自らが適切な学修計画を立案していくうえで効果を発揮する手立てを確立していく。

学生教育に密着して運用される学修情報ネットワークシステムは学内ネットワーク上で稼働し、総合学修支援センターでの業務などに利用できるようにするほか、学生自身がキャンパス内の無線LANなどをつうじて、スマートフォンやノートパソコンなどを介していつでもどこでもアクセスし、自身の学修状況に関する分析情報を参照できるようにする。その本格稼働に先立ち、学生によるモニター試用を実施し、最終的なシステムの改善と調整にあたる。なお、この時点では新年度の成績が出ていないので、2年生以上の学生により前年度までの成績データを利用したモニタリングをおこなっていく。

- ④ 前期における総合学修支援センターの支援業務を全体的に検証するため、利用者である学生にアンケート調査を実施し、その検証をつうじて同センターの支援業務の調整と改善計画を立て、その実施にあたる。

学生を対象に総合学修支援センターの支援業務や成績評価制度、ベンチマーク制度についての理解の程度やユーザビリティ、満足度等のアンケート調査を学習マネジメントシステムを活用して実施する。その結果と検証をつうじて学修支援や本業務全体の改善に反映させ、学生の目的・関心・学修特性に合致した学業計画設計とその遂行の向上につなげる。

- ⑤ 前期におけるfGPAシステムによる学修評価を算定し、必要な分析を施したうえで学修情報ネットワークシステムに載せ、学生と総合学修支援センタースタッフによるモニタリングを実施し必要な調整をおこなう。そのうえで後期から同システムを全学に公開し本格稼働させる。また、総合学修支援センターにおいて同システムを活用した支援相談業務を追加する。

fGPAによる成績評価が前期にはじめて出ることになるので、それに対する多角的な分析を施したうえで、その結果を学修情報ネットワークシステムに反映させて学生個々に提示していくことになる。これにより当事業の主目的である多次元的な学士力養成にむけて学生自らが事実データを拠り所にして主体的に学修計画を策定していくという具体的な方途がもたらされることになる。それに先立ち、学生にヒアリングをしながら必要な調整をおこない効能発揮のための準備を尽くす。

- ⑥ 教育に関する事業としておこなった当事業に対する評価と事業成果を踏まえて今後、学生教育の支援に関してさらに発展的に展開をはかるために必要なことを探ることを目的にした公開シンポジウムの企画立案にあたり、開催に必要な準備と手続きをおこなう。

そのために、類似の取り組みを実施し、それぞれの成果をあげている他大学の事例研究と調査による確認作業を並行する。

- ⑦ 後期から稼働する教育に密着した学修情報ネットワークシステムの効果やユーザビリティに関する検証をおこなう。そのため学生アンケート調査を実施し、分析のうえ改善にあたる。これにより、現実的な観点から学生の学修航行のガイドに必要なことがらや整備内容をあきらかにして、学生教育にとってのシステムの有効性をさらに高めていく。
- ⑧ 本事業についての評価と成果報告のために第2回公開シンポジウムを実施する。これをつうじて以上の成果報告を開示するとともに、その内容を含めた当事業全体の成果報告書をまとめ、その全体をウェブや冊子（本書）にして公開することで大学界全体にとっての教育の質保証や学士課程の構築作業の一端に資するようにする。

（4）学内合意形成過程

平成23年度の事業推進と学内合意形成のために開催された会議と、そこでの主たる関連議題はつぎのとおりであった。なお、本事業関連の議題について取りあげているため、会議によっては開催回数が必ずしも連番になっていない場合がある。

平成23年4月11日 教育企画室会議（第1回）で会議計画、履修ガイドなどについて検討

平成23年5月16日 教育改革部会（第1回）で年間計画などについて検討

平成23年5月20日 教育開発センター会議（第1回）で年間計画、大学教育推進プログラム本年度事業などについて検討

平成23年5月31日 全学教育システム改革推進本部会議（第1回）で教育開発センター年間計画などについて検討

平成23年6月13日 複数プログラム選択履修専門部会会議および総合学修支援センタ会議（第1回）で、成績証明書、履修登録における主プログラムと強化プログラムの識別のあり方、主プログラムの学生振り分け、学修成績情報システムの開発と学生への個別指導のあり方、総合学修支援センターの学修相談状況報告などについて検討

平成23年6月27日 教育企画室会議（第6回）で成績評価と学修に関する課題と対応、成績評価情報に関するガイドラインなどについて検討

平成23年7月27日 教育開発センター会議（第2回）でPlone利用状況報告、FD関連の状況報告、FDの計画などについて検討

平成23年9月5日 教育企画室会議（第9回）で成績評価情報に関するガイドライン、年間計画の進捗状況などについて検討

平成23年9月5日 複数プログラム選択履修専門部会会議および総合学修支援センタ会議（第2回）で、成績証明書・通知票の様式変更、総合学修支援センターの学修相談状況報告などについて検討

平成23年9月30日 教育企画室会議（第10回）で3年次編入とプログラム選択履修制度などについて検討

平成23年10月24日 教育企画室会議（第11回）で3年次編入学生における主プログラム選択時期

などについて検討

平成 23 年 11 月 10 日 教育企画室会議(第 12 回)で教育開発センターの後期業務、教育改革リーフレットなどについて検討

平成 23 年 11 月 11 日 複数プログラム選択履修専門部会会議および総合学修支援センタ会議(第 3 回)で、3 年次編入学生における主プログラム選択時期、主プログラム選択予備調査の結果と今後の予定、履修指導と選択希望調査の体系化などについて検討

平成 23 年 11 月 14 日 学務部会会議(第 6 回)で各学部履修規程の一部改正などについて検討

平成 23 年 12 月 5 日 教育企画室会議(第 14 回)で成績評価情報に関する利用ガイドラインなどについて検討

平成 23 年 12 月 19 日 教育企画室会議(第 15 回)で大学リーフレット、成績評価情報に関する利用ガイドラインなどについて検討

平成 23 年 12 月 21 日 教育改革部会(第 6 回)で学修の支援(システム)に関するアンケート調査などについて検討

平成 24 年 1 月 16 日 教育企画室会議(第 16 回)で 3 年次編入生のプログラム履修、平成 24 年度履修ガイド、時間割などについて検討

平成 24 年 2 月 6 日 複数プログラム選択履修専門部会会議および総合学修支援センタ会議(第 4 回)で、年間計画、行事日程、入学者ガイダンスなどについて検討

(5) 具体的な事業成果

平成 23 年度の事業の具体的な成果はつぎのとおりであった。

- ① 複数プログラム選択履修制度を学士課程の高年次カリキュラムの全面リニューアルとして導入した。
この新制度は平成 23 年度新入生から学年進行で適用されていくため、実際に多様なプログラム選択がおこなわれたのは翌年度以降だが、導入年度は前年度に実施した履修シミュレーションの結果や一部学部で学生に対して実施した選択履修希望調査の結果も踏まえながら本格的な選択履修を控えての調整作業をおこなった。

この学生の主体的な学修プランニングを支援するために、カリキュラムを構成するすべての科目について、それぞれのカリキュラム構成上の位置づけや授業目標に応じた授業水準をわかりやすく可視化したカラーコードベンチマークシステムを適用した。このベンチマーキングが科目履修にあたって便利なガイドになることはあきらかだが、その実効性も高年次においての選択履修においてより高まっていくことが期待される。また、カラーコードベンチマークは履修時のみならず、学修成果をみる場合にも学期ごとの成績通知票、最終的な成績証明書に成績とともに付記されることで、学修履歴の質的側面をあらわす指標として役立つことになる。このベンチマーク付きの成績通知も平成 23 年度前期にはじめて初年次生に配布されたが、今後のはちに述べる学修情報支援システムなどもつうじて学内で一般的な指標となって生きてくることになる。

また、ファンクショナル GPA 制度は教育成果の質保証を担う基盤制度として機能するものであり、

厳格な成績評価のもとで評定された原成績を、そのまま一次変換してあらわされる fGPA によって運用されはじめた。これも今後、きめ細やかな学修状況分析と課程全期にわたるプロセス評価を可能にし、成果に律動した動的な学修プランニングを可能にしていくことになる。

- ② 初年次生からはじめて導入される複数プログラム選択履修制度や fGPA 制度による成績評価のプロセス評価などの新施策を適切に支援し、その円滑な運用と、全学的に学生に対する教育サービスを一層充実させるために総合学修支援センターを学生センター棟 1 階の教務チームに隣接する部屋に設置し、稼働させた。

このセンターは総合学修支援センター会議（各学部から選出された教員などで構成）のもとで運営され、センター実務には学修支援特任のリサーチフェローのほか、学生のピアサポートの役割も担う大学院生 3 名をアカデミックアシスタントとして雇用、後者を常時配置した。来談者には質問内容やそれに対する対応、回答内容などの記録をとり、適宜利用者に対するヒアリングを実施してモニター調査資料を蓄積する。同時にピアサポーターのオンザジョブトレーニングを並行し、学生に対する教育効果を高めるためのサービス体制を整えることができた。

この施策によって複数プログラム選択履修制度における多次元的な学修に際して、全学的な観点から必要とされる情報や案内、相談に対応し、新カリキュラムが意図する学生ニーズに適合した学修による教育効果の発揮を確実なものにしていく目処をたてることができた。

- ③ 教育に密着した学修情報ネットワークシステムを前年度までのあいだにその基本型を開発した。これを学内のイントラネット上の試用環境下で動かし、ユーザビリティの改善とシステム駆動の確実性に関してモニター試用を開始し、逐次、システムの改善にあたった。

このシステムは学生自らが適切な学修計画を主体的に立案していくうえでの基盤情報を提供するものであり、そのプランニングにおいて効果を発揮することになる。そのための具体的な手続きについての検証を重ねた。

来年度以降、総合学修支援センターや教務窓口での来談業務に利用するほか、学生自身がキャンパス内において自己認証手続きをとったうえでいつでもアクセスし、自身の学修状況に関する分析情報を参照できるようになる。その本格稼働に先立ち、学生によるモニター試用を実施し、最終的なシステムの改善と調整にあたった。

このシステムは商用パッケージによらず、教育開発センターが独自に開発したもので、今後、オープンソース化を図って他大学での運用にも少しの調整で可能にしていくことが可能になっている。IR の観点も加味した教育成果情報システムの大学間共同運用は、運用効率を高めながら教育の質保証も高めていく新たな教育改革施策に展開していくことができる。

- ④ 総合学修支援センターや本学の学修支援（システム）についての検証を学生アンケート調査によって実施した。当初、この調査は夏に実施予定であったが、前期後半に来談者が減少したことから、後期始めにそれが増加することが予測されたため、少しでも多くのデータを集めて検証することが望ましいと判断し、同時に学修支援情報や学修全般の支援についても広範に意見聴取するよう設計して 23 年度 12 ～ 1 月に調査を実施した（⑦参照）。

総合学修支援センターに関する調査内容はセンターに対する在学生の認知度、利用割合、必要性についての認識、学修に関する相談をよくする相手、利用者については来談内容、利用満足度、提案などであった（具体的な結果の詳細については3-1に載せた）。この結果分析をつうじて学修支援や同センター業務全体の改善に反映させ、学生の目的・関心・学修特性に合致した学業計画設計とその遂行の向上につなげていく指針を得ることができた。その実際の改善作業は翌年度に引き継がれる。

- ⑤ fgPA システムによって初年次生における学修成果を算定し、多角的な分析を施したうえで学修支援情報ネットワークシステムへの展開をおこなった。同システムについて学生によるモニタリングを実施し、バグ検証と必要な調整をおこなった。後期からこれを全学に公開し、総合学修支援センターにおける支援相談業務に加えることを計画していた。これにより当事業の主目的である多次元的な士力養成にむけて学生自らが事実データを拠り所にして主体的に学修計画を策定していくという具体的な方途がもたらされることになる。

ただし、この点は各部局と総合学修支援センターの学修支援業務の役割分担の調整や成績分析情報の活用範囲についての全学的な認識の共有や合意形成をすこし時間をかけておこなう必要があり、1年分の実際の分析データが得られたあとに支援や学修計画の実際を示しながら慎重におこなっていくことになった。ただし、その前提となる学修支援情報のネットワークシステム自体は当初の計画どおりに仕上げることができ（2-2（13）（14）参照）、合意がとれ次第、いつでも全学的に用いることができるよう整備することができた。

- ⑥ 学生教育の一層の改善を図るためにおこなってきた当事業に関する評価とその事業成果を踏まえて今後の学修支援のさらなる発展的な展開を持続するために必要なことを探索することは当事業の成果を盤石なものに仕上げていくために不可欠な作業となる。そのため、類似の取り組みを実施し、それぞれの成果をあげている他大学の事例研究と調査による確認作業をおこない当事業についての成果評価の基礎データを整備しながら最終的な公開シンポジウムと最終成果報告書の企画と準備にあたった。

総合的な学修支援として特徴的な成果をあげている他大学事例として、成績評価の学内外への公開による共有やラーニングコモンズの設置による全学的な学修支援に積極的な同志社大学、教育 GP を契機にアカデミックプランニングセンターを設置し、ピアサポートを主体にした全学共有の学修計画・支援を実施してきている国際基督教大学、本学と類似した女子大学としてきめ細かな学修支援とそれに関する調査活動を実施した奈良女子大学の3大学に着目し、12月に各大学に取材をおこない、本学で開催する公開シンポジウムでの講演と討論参加を依頼した。


また、当初計画では当事業についての外部評価をおこなう予定であったが、当事業の成果は2-2にもまとめたように施策と改革・改善結果が具体的なエビデンスを伴いあきらかとなったため、この公開シンポジウムをつうじてその成果報告をおこない外部機関とのその共有化と今後の連携を志向することで代替することにした。その意味もあつて今後の教育関連における文部科学省の新規事業の方向性も学ぶ必要性を感じたことから、この機会に同省高等教育企画課からの参加と登壇をお願いした。

- ⑦ 当事業で核をなす施策であった学生教育に密着した学修情報ネットワークシステムと総合学修支援センターを学生のニーズにあわせて調整するため、学修支援（システム）に関するアンケート調査を実施した。実査は平成 23 年度 12 ～ 1 月に郵送による質問紙調査によっておこない、学部生を対象に各学年からランダムサンプリングした 200 名、計 800 名（全学部生の約 4 割に相当）に送付した。その結果、回収率 56.5% の回答を得てこれを集計、分析した。

この結果をもとに学修情報ネットワークシステム、24 時間利用できる授業・学習支援システム、および総合学修支援センターについて具体的な改善点をあきらかにすることができ、現実的な観点から学生の学修航行のガイドに一層資するよう整備する目処をつけることができた。この調査結果については当報告書 3-1 に記載した。

- ⑧ ⑥に記した準備を経て、第 2 回公開シンポジウム『大学で確かに学び修めていくために！ — その学修支援に向けて』を 3 月 17 日、お茶の水女子大学において実施し、北は北海道、南は九州から 70 機関、100 名を越える参加者を得て、国際基督教大学から森島義則上級准教授、同志社大学から圓月勝博教授、奈良女子大学から佐原康夫教授、本学から半田智久、および文部科学省から義本博司高等教育企画課長による 5 つの講演報告と全体討論をおこなって企図した成果をあげることができた。

その詳細報告は本報告書の別冊として独立の報告書冊子を作成、関係機関に配布するとともに、大学ウェブサイトに掲載して公開する段取りである。また、当初計画にあった最終成果報告書はいうまでもなく本書である。



2-2 エビデンス・ベースでの事業成果のまとめ

(1) カラーコードベンチマークの導入

平成 23 年度から複数プログラム選択履修制度を導入した。所属学科や専攻の典型的な履修階梯を上
がるだけでなく、学科や学部を越えてまとまりのある履修を可能にする仕組みだが、この学修を効果的
に促進、ガイドするために学士課程に開講している 1672 科目すべてについて、学修順序性や到達目標
に照らしたカリキュラム構造上の水準（ベンチマーク）を 5 色■□のカラーコードで分類し、明
示する体系を導入した（複数プログラム選択履修制度は平成 23 年度入学生から学年進行で適用される
が、科目のベンチマークは従前のカリキュラム履修にあたって学修計画を立てるにあたって有効な指
針になるため全科目に適用した）。

この結果、毎年学生に配布する「履修ガイド」はカラーコードが配され、下図の状態から次ページの
図にみるように様相が大きく変化した。また、次項に示すように「成績通知票」「成績証明書」にもカラー
コードが示されて学修内容の質的情報がわかるかたちに様相が一変した。

別表第 3 (第 4 条関係)

人間・環境科学科

授業科目 単位数 備考(ローマ数字は、標準履修年次を示す。)

●専門科目

●専攻科目(必修)

有機化学 I	2	(I)
数学物理学演習 I	2	(I)
基礎物理学	2	(I)
人体解剖学	2	(I)
基礎生化学 I	2	(II)
統計学	2	(II)
環境化学	2	(II)
科学英語演習 I	2	(III)
同 II	2	(III)
人間・環境科学実験演習 I	2	(III)
同 II	2	(III)
同 III	2	(III)
人間・環境科学論議 I	2	(IV)
同 II	2	(IV)
卒業論文	10	(IV)

●専攻科目(選択必修)(基礎科目) 20

有機化学 II	2	(I)
設計製図基礎	2	(I)
数学物理学演習 II	2	(I)
同 III	2	(II)
同 IV	2	(II)
*物理化学英語 I	2	(II)
*同 II	2	(II)
移動現象論	2	(II)
人体生理学	2	(II)
建築物理学	2	(I・II)
人体計測学演習	4	(II)
機器分析演習	2	(II)
システム工学	2	(III)
基礎生化学 II	2	(III)
統計学演習	2	(III)
人間・環境科学演習	4	(III)

*印はコア科目外国語(必修)英語に充てることができる。

●専攻科目(選択必修)(専門科目) 12

人類進化史	2	(II)
建築環境計画論	2	(II)
建築環境工学	2	(I・II)
人間工学	2	(II)
環境物理学	2	(III)
環境材料物性	2	(III)
水環境工学	2	(III)
人間・環境科学特別講義	2	(III)
**人間・環境科学特別演習 I	2	(III)
**同 II	2	(III)

**印は両科目を履修することは出来ない。

●専攻科目(選択)(建築士受験資格関連科目)

建築一般構造	2	(I)
建築材料学 I	2	(II・III)

建築意匠論	2	(II・III)
建築構造力学	2	(II・III)

●学部共通科目	8	
生活科学概論	2	
基礎有機化学	2	(II)
分析化学	2	(II)
ヒトと文化	2	(I～III)
被服科学	2	
発達社会学	2	
ジェンダー論	2	
比較ジェンダー論	2	
人口学	2	
社会保障論	2	(II)
企業経営論	2	
消費者科学入門	2	
生活造形論	2	
民俗学	2	(I～IV)
生活設計論	2	
生活法総論	2	
比較家族思想史	2	
老年学	2	
服飾文化概論	2	
服飾美学概論	2	
国際栄養学	2	(I～IV)
食糧経済学	2	
食生活史	2	
環境衛生学	2	(II)
人間関係学	2	(II)
応用統計学	2	
家族関係論	2	
家政経済学概論	2	
被服学概論	2	
食物学概論	2	
生活設備学	2	(II)
住居学概論	2	(I)
児童学概論	2	(I)
発達臨床心理学概論	2	(II)
保育臨床学	2	(II)
学校臨床学	2	(II)
医療と健康	2	

●専攻科目(選択)―高大連携科目
人間・環境科学選択基礎 2

高大連携科目は、大学との連携を行っている高校の生徒が履修する科目であるため、大学生は履修できない。なお、履修した生徒が本学に入学した場合は、当該科目は別表第 1 (第 4 条関係)「自由に選択して履修する科目・単位」内の「専攻科目 選択」の単位として認定することができる。

◎自由に選択して履修する科目 16

従前の履修ガイドにおける履修科目案内ページ

授業科目	単位	履修年次	CCBM	プログラム			備考
				主プログラム	必修	選択	
教育思想特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	○の科目から8単位選択
教育人間学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	○の科目から4単位以上選択
教育史特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育史料分析特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育社会学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
学校社会学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
文化人類学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
民族誌学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育方法学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育課程特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育開発特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
比較教育特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
生涯学習特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
社会教育学特殊講義	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育科学特殊講義Ⅰ	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育科学特殊講義Ⅱ	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育科学特殊講義Ⅲ	2	I～IV	Green	○	○	○	
教育科学特殊講義Ⅳ	2	I～IV	Green	○	○	○	
学校インターンシップ	2	Ⅱ～Ⅲ	Green	○	○	○	
児童社会文化論	2	Ⅱ～Ⅳ	Ivory	○	○	○	
博物館学概論	2	I		○	○	○	
教育科学選択基礎	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育思想演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育人間学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育史演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育史料分析演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育社会学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
学校社会学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
文化人類学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
民族誌学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育方法学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育課程演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育開発演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
比較教育演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
生涯学習演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
社会教育学演習	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育科学演習Ⅰ	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
教育科学演習Ⅱ	4	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
社会教育計画Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Ivory	○	○	○	
社会教育計画Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Ivory	○	○	○	
社会教育特講Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Ivory	○	○	○	
社会教育特講Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Ivory	○	○	○	
社会教育課題研究	2	Ⅱ～Ⅳ	Ivory	○	○	○	
社会教育実習	2	I	Pink	○	○	○	
教育実地研究	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
教育科学研究指導Ⅰ	1	Ⅲ	Red	○	○	○	
教育科学研究指導Ⅱ	1	Ⅳ	Red	○	○	○	
卒業論文	8	Ⅳ	Red	○	○	○	

授業科目	単位	履修年次	CCBM	プログラム			備考
				主プログラム	必修	選択	
文化変動論Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	以下の科目から4単位以上選択
文化変動論Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
イスラム社会文化論Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
イスラム社会文化論Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
オセアニア社会文化論Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
オセアニア社会文化論Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
対日交流論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
中国社会文化論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
東アジア社会文化論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
南アジア社会文化論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
アフリカ社会文化論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
地域研究特論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
英米事情	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
文化と人間関係Ⅰ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	以下の科目から4単位以上選択
文化と人間関係Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
グローバル化と言語教育Ⅰ	2	Ⅲ～Ⅳ	Green	○	○	○	
グローバル化と言語教育Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
文化と心理	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
表現行動論Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
表現行動論Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
言語と社会Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Pink	○	○	○	
言語と社会Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
多文化共生論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際交流論Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際交流論Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
多文化交流特論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際協力方法論Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際協力方法論Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
平和構築論Ⅰ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	以下の科目から4単位以上選択
平和構築論Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
国際開発論Ⅰ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
国際開発論Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
グローバル化と労働	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○	○	○	
国際機構論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際教育協力論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
NGO/NPO論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
比較社会政策論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
地域開発論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際金融論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際協力特論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
多文化交流実習Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
多文化交流実習Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
多文化交流実習Ⅲ	2	Ⅱ～Ⅳ	Red	○	○	○	
多文化交流実習Ⅳ	2	Ⅱ～Ⅳ	Red	○	○	○	
グローバル文化実習	2	Ⅱ～Ⅳ	Red	○	○	○	以下の科目から4単位以上選択
地域研究実習Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
地域研究実習Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際協力実習Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○	○	○	
国際協力実習Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Red	○	○	○	

カラーコードベンチマークが入った新しい履修ガイドにおける履修科目案内ページ

(2) 成績評価指標に GPA を導入

平成 23 年度から学年進行で成績評価指標に GPA (Grade Point Average) 指標を正式に導入した。この GPA は 100 点満点に標準化した素点から直接グレードポイントを算出する functional GPA の方法を採用している。これにより教員が厳格厳正に評価した成績が齟齬なく GPA に反映される。そのため、この値を学修計画はもとより、表彰や選抜、成績低迷の探知、IR など学修支援や学生支援、情報公開や分析に幅広く活用できる体制を整えることができた。

端的には学生に毎学期配布している「成績通知票」や申請により取得する「成績証明書」にはカラーコードベンチマークを伴った GP、GPA が記載され、従前の下図の状態から右ページに示すように情報豊かな通知と証明になり、本学の教育の質保証の一端を具体的にあらわすものとなった。

成績証明書				No. 59718			
理学部		学科		生年月日 昭和63年10月12日生			
0800000		お茶の水博士		平成24年3月23日 卒業見込			
入学年月日		平成00年4月1日					

授業科目	単位	評価	年度	授業科目	単位	評価	年度	授業科目	単位	評価	年度
【文理融合リベラルアーツ】				計算物理学	4	A	10				
生活世界の安全 現代社会技術	2	B	09	物理実験研究	2	A	09				
基幹学				量子光学研究	2	B	10				
生活世界の安全 基礎現代物質	2	A	08	物理学特別講義Ⅱ	2	B	10				
基幹学総論				物理研究	2	B	08				
【基礎講義】				場の量子論	2	A	10				
哲学Ⅱ	2	A	08	物理学基礎	2	A	10				
論理学	2	C	08	初等解析学Ⅱ	2	B	09				
法学	2	A	08	地球環境研究	2	B	08				
政治学Ⅱ	2	A	08	【生活文化学講座】							
基礎幾分幾分学	2	A	08	実学論	2	A	09				
中級幾分幾分学	2	B	09	【全学共通科目】							
安全管理学	2	B	08	数の歴史研究	2	A	08				
【総合科目】				基礎化学論	2	B	09				
コンテンツ・リベラルアーツ特別講義	2	A	09	基礎化学研究	2	B	08				
コンテンツ・リベラルアーツ特別講義	2	A	09	基礎生物学論	2	C	08				
【情報】				【教職に関する科目】							
情報処理論	2	N	08	教職総合研究	2	A	09				
【外国語】				教育実論(思惑・歴史)	2	B	09				
基礎英語論	2	C	09	教育実論(社会・制度)	2	C	08				
基礎英語Ⅱ	2	B	08	教育心理学	2	B	09				
中級英語Ⅱ	2	A	10	教育課程Ⅱ	2	B	09				
【スポーツ健康】				理科教育研究	2	B	10				
スポーツ健康	1	B	08	理科教育法Ⅱ	2	A	10				
スポーツ健康Ⅱ	1	A	08	特別活動の研究Ⅱ	2	A	09				
【物理学】				教育方法研究	2	A	09				
熱力学	2	B	10	生徒指導	2	A	09				
統計	2	A	10	学校論	2	B	10				
古典力学	2	B	08								
解析論	2	B	08								
力学論	2	A	09								
電磁気論	2	B	09								
電磁気学Ⅰ	2	B	08								
物理数学Ⅰ	2	A	08								
物理数学中級	2	A	10								
量子力学Ⅰ	2	A	10								
量子力学中級	2	C	09								
量子力学特別講義	2	B	10								
相転移	2	B	10								
素粒子特別講義	2	A	10								
基礎物理学	2	B	09								
物理学Ⅱ	4	B	10								
力学Ⅱ	2	B	08								
電磁気学	2	B	09								
物理数学特別講義	2	A	10								
量子力学Ⅱ	2	B	09								
統計力学	2	B	10								
相対論Ⅱ	2	A	09								
【副専攻等の履修】											

成績評価 S: 基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている
 A: 基本的な目標を十分に達成している B: 基本的な目標を達成している
 C: 基本的な目標を最低限度達成している N: 認定

上記のとおり証明する。

平成23年4月1日

お茶の水女子大学長 羽入 佐和子

従前に発行されていた成績証明書

①表面

成績証明書

No. 15706

文教育学部 言語文化学科（日文）
0410101 お茶の水 花子

生年月日 平成元年1月1日生

入学年月日 平成23年4月1日
卒業年月日 平成27年3月23日

授業科目	CCBM	単位	評価	年度	授業科目	CCBM	単位	評価	年度	授業科目	CCBM	単位	評価	年度
			LG	GP				LG	GP				LG	GP
【文理融合リベラルアーツ】					日本古典文学論演習（近世）Ⅱ	2	A	3.22	06	【教職共通科目】				
色・音・香6 色・音・香と生活文化	2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（近代）Ⅰ	2	A	3.22	06	社会科教育論	2	A	3.22	04
色・音・香7 舞踊における色・音・香	2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（近代）Ⅱ	2	A	3.22	06	算数科教育論	2	A	3.22	05
色・音・香8 宗教と色・音・香	2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（現代）Ⅰ	2	A	3.22	06	理科教育論	2	A	3.22	05
色・音・香9 おいさと色・音・香	2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（現代）Ⅱ	2	A	3.22	06	生活科教育論	2	A	3.22	05
色・音・香10 知覚認知と環境デザイン	2	A	3.22	04	日本語学演習Ⅰ	2	A	3.22	06	- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	8		3.22	
ことばと世界4 文化の記号学	2	A	3.22	04	日本語学演習Ⅱ	2	A	2.22	06	【教職に関する科目】				
- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	12		3.22		日本語学研究指導	2	A	3.22	06	教職概論	2	A	3.22	04
【情報】					日本文学研究指導	2	A	3.22	06	教育原論（思想・歴史）	2	A	3.22	04
情報処理演習	2	A	3.22	04	卒業論文	8	A	3.22	07	教育原論（社会・制度）	2	A	3.22	05
- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	2		3.22		- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	46		3.22		教育心理	2	A	3.22	04
【外国語】					【日本語・日本文学強化プログラム】					教育課程論	2	A	3.22	05
基礎英語Ⅰ	2	A	3.22	04	日本古典文学史論（上代）	2	A	3.22	04	英語科教育法Ⅰ	2	A	3.22	04
基礎英語Ⅱ	2	A	3.22	04	日本古典文学史論（中古）	2	A	3.22	05	英語科教育法Ⅱ	2	A	3.22	05
総合英語Ⅰ	2	A	3.22	04	日本古典文学史論（中世）	2	A	3.22	05	道徳教育の研究	2	A	2.23	05
中級英語Ⅰ	2	A	3.22	05	日本古典文学史論（近代）	2	A	3.22	05	特別活動の研究	2	A	3.22	04
中級英語Ⅱ	2	A	3.22	05	日本近代文学史論（近代）	2	A	3.22	05	教育方法論	2	A	3.22	05
中級英語Ⅲ	2	A	3.22	05	日本近代文学史論（現代）	2	A	3.22	06	視聴覚教育メディア論	2	A	3.22	05
フランス語初級（文法）Ⅰ	2	A	3.22	05	日本近代文学論特殊研究（近代）	2	A	3.22	06	生徒指導の研究	2	A	3.22	04
フランス語初級（文法）Ⅱ	2	A	3.22	05	日本近代文学論特殊研究（現代）	2	A	3.22	06	学校カウンセリング	2	A	3.22	05
フランス語初級（演習）Ⅰ	2	A	3.22	05	日本語学特殊講義Ⅰ	2	A	3.22	06	小学校教材研究（国語）	2	A	3.22	05
フランス語初級（演習）Ⅱ	2	A	3.22	05	日本語学特殊講義Ⅱ	2	A	3.22	06	小学校教材研究（社会）	2	A	3.22	04
- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	20		3.22		日本古典文学論特殊講義Ⅰ	2	A	3.22	06	小学校教材研究（算数）	2	A	3.22	05
【スポーツ健康】					日本古典文学論特殊講義Ⅱ	2	A	3.33	07	小学校教材研究（理科）	2	A	3.22	05
スポーツ健康実習	2	A	3.22	04	- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	24		3.22		小学校教材研究（生活）	2	A	3.22	07
スポーツ健康実習	2	A	3.22	04	【消費者学学際プログラム】					教職総合演習	2	A	3.22	07
- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	4		3.22		企業経営論	2	A	3.22	04	- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	38		3.22	
【日本語・日本文学主プログラム】					家政経済学概論	2	A	3.22	04	【全学共通科目】				
日本文学概説	2	A	3.22	04	環境衛生学	2	A	3.22	05	レギュラトリー・サイエンス概論	2	A	3.22	04
日本語学通論	2	A	3.22	04	生活設備学	2	A	3.22	05	- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	2		3.22	
英語圏言語文化概論	2	A	3.22	04	医療と健康	2	A	3.22	05					
ヨーロッパ言語文化論	2	A	3.22	05	社会保障論	2	A	3.22	06					
中国古典文学史（先秦～唐）	2	A	3.22	05	被服学概論	2	A	3.22	07					
中国古典文学史（宋～清）	2	A	3.22	05	食物学概論	2	A	3.22	05					
言語学概論	2	A	3.22	05	食糧経済学	2	A	3.22	06					
日本古典文学論講読（上代）	2	A	3.22	05	住居学概論	2	A	3.22	07					
日本古典文学論講読（中古）	2	A	3.22	05	- 単位数小計と上記科目区分のGPA -	22		3.22						
日本古典文学論講読（近世）Ⅱ	2	A	3.22	05						不合格科目の単位数合計	0			

【複数プログラム履修修得状況】	コア科目		プログラム科目		左記以外		合計			
	CCBM	実務単位数	GPA	実務単位数	GPA	実務単位数	GPA	実務単位数	strictGPA	generalGPA
日本語・日本文学主プログラム										
日本語・日本文学強化プログラム										
消費者学学際プログラム										
【リベラルアーツ系列履修修得状況】										
色・音・香										
合計								172	3.22	3.14

【成績評価】

S：基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている

A：基本的な目標を十分に達成している

B：基本的な目標を達成している

C：基本的な目標を最低限度達成している

N：認定（GPAの算定には含まれない）

上記のとおり証明する。

平成27年3月23日

お茶の水女子大学長

羽入 佐和子



あらたに発行されるようになったカラーコードベンチマークや GP・GPA が記載された成績証明書

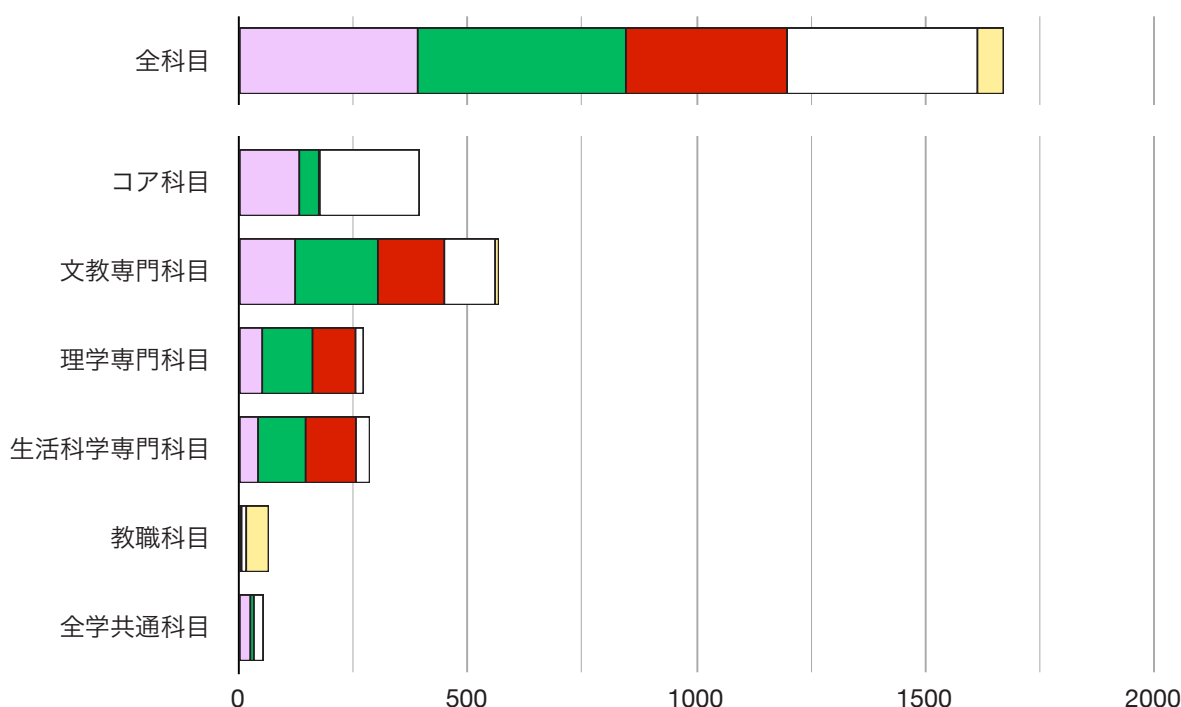
(3) 開講科目における各カラーコードベンチマークの数と割合

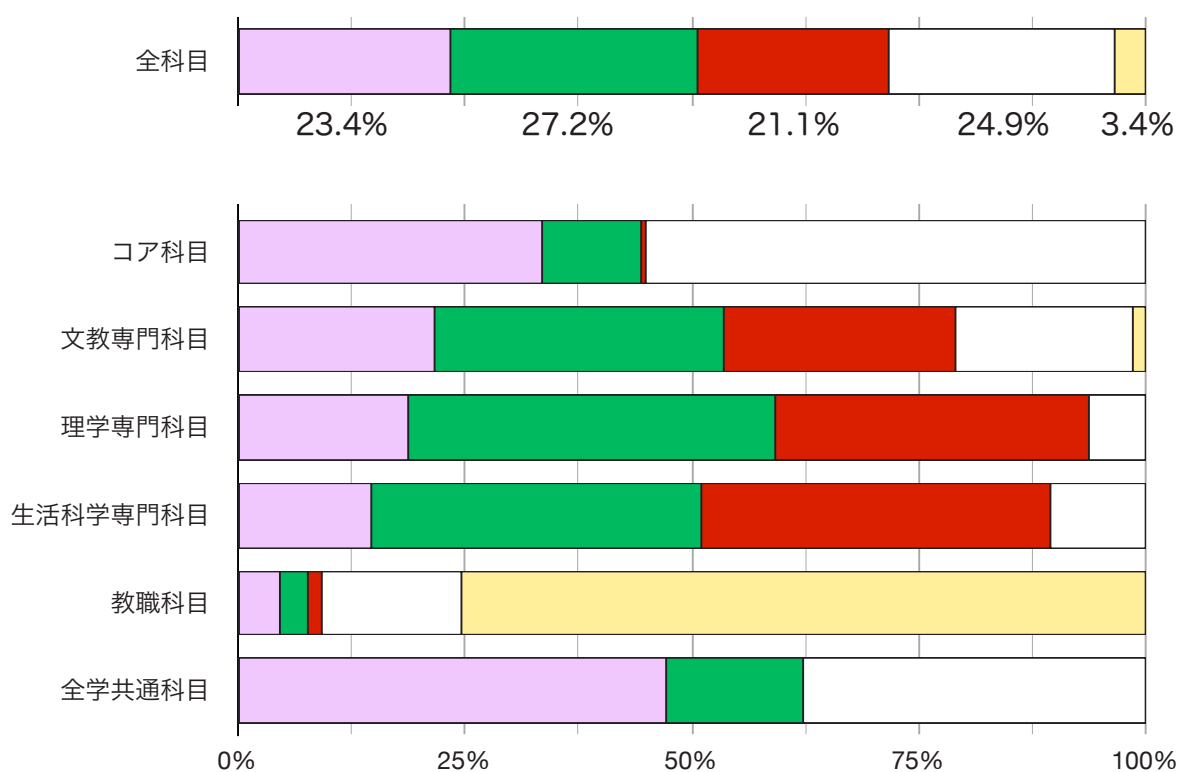
カラーコードベンチマークは複数プログラム選択履修制度の導入時期にあわせて、同制度が適用されない学年の科目も含めて学士課程の全授業科目に適用された。その結果、2011 年度前期において開講された 1671 科目に占める各ベンチマークの科目数、および主要科目分類別のそれは下に示す図表のようになった。教職関連科目のアイボリーを除けば、ピンク・グリーン・レッド・ホワイの各ベンチマーク科目が全科目に占める割合は大きな偏りなく構成されたことが確認できる。この点をよりわかりやすく示すために、右ページのグラフでは各科目分類別にベンチマーキングの構成割合を示した。

開講科目分類別の各ベンチマーク科目数とそれをあらわしたグラフ（2011 年度前期）

	ピンク	グリーン	レッド	ホワイ	アイボリー	合計
全科目	391	455	352	416	57	1671
コア科目	132	43	2	217	0	394
文教専門科目	123	181	145	111	8	568
理学専門科目	51	110	94	17	0	272
生活科学専門科目	42	104	110	30	0	286
教職科目	3	2	1	10	49	65
全学共通科目	25	8	0	20	0	53

注）この表で全科目にはここに表記していない日本語教育科目や単位互換科目が若干含まれている。そのため表中の全科目以外の科目数を合計しても全科目数には一致しない。

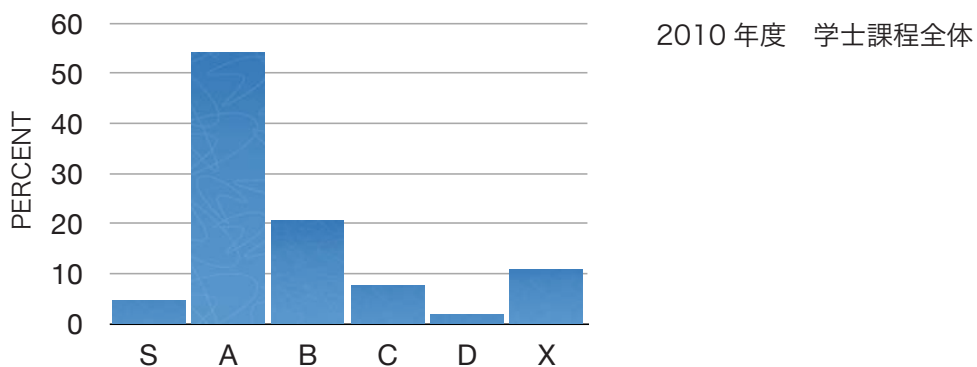
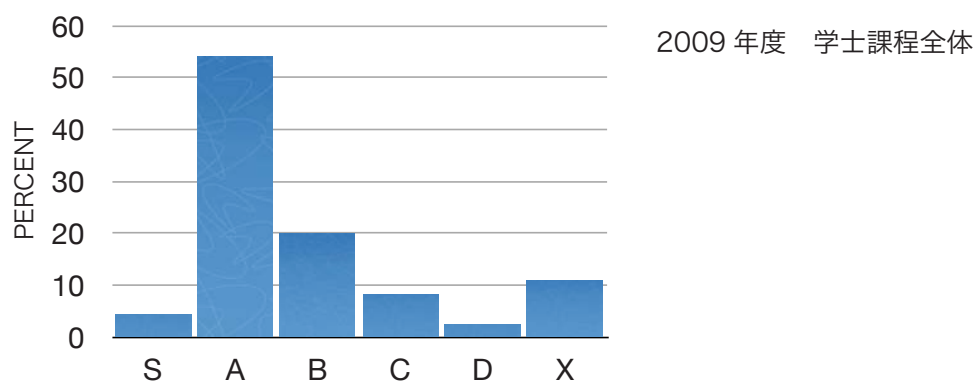
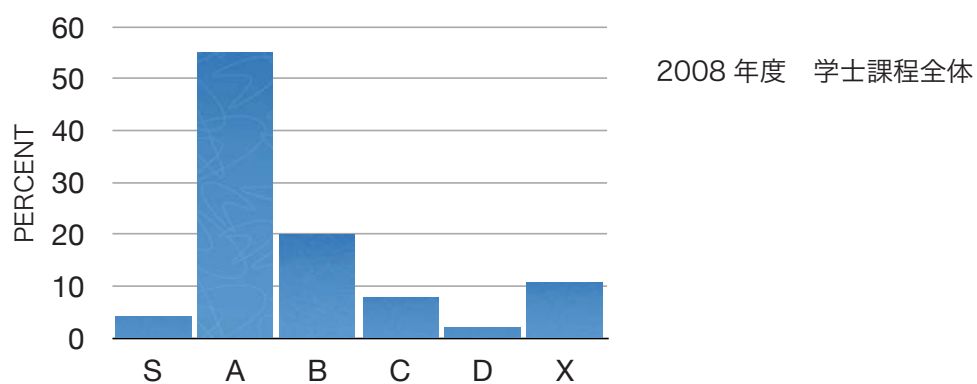




開講科目分類別にみた各ベンチマーク科目の構成割合（2011 年度前期）

(4) 成績評価 レターグレード評価の割合から

本学の成績評価についてはレターグレード評価において、A 評価の過多、それに比較して S 評価の過少というパターンが年度を越えて固定化していた。それぞれのグレードの成績評価基準として B が「基本的な目標を達成」に対して A がこれに「十分」が付加されている違いがある。見方によっては「十分な達成」が「達成」の 2 倍以上あり、半数を越えている状況は授業全体の到達目標が低めに設定されていて、学生からすればその力量に対して易しすぎる授業が多くなっているのではないか、あるいは授業内容は別として評価自体が甘くなっているのではないか、という懸念も感じさせる状態になっていた。

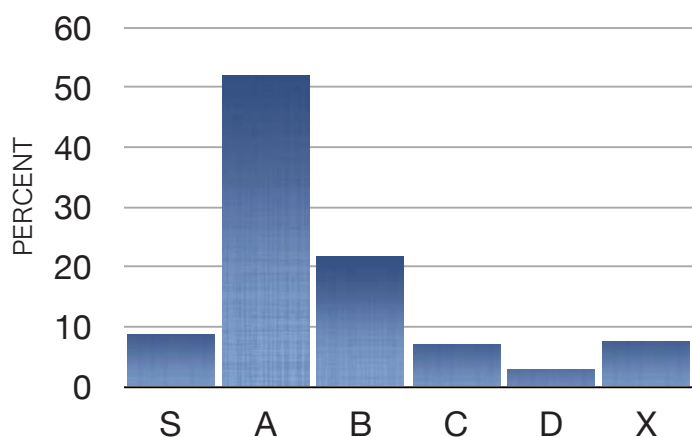


A 評価の過多に比較して S 評価の過少は S 評価についてはクラスの 5% 以下を目安にするという数量規制があったことにもよる。だが、「十分な達成」が 50% を越えていて「きわめて優秀な成果」となると 5% に限られるとなると「達成」を越えた「十分」が意味するところの幅が不自然に大きいといわざるをえなかった。

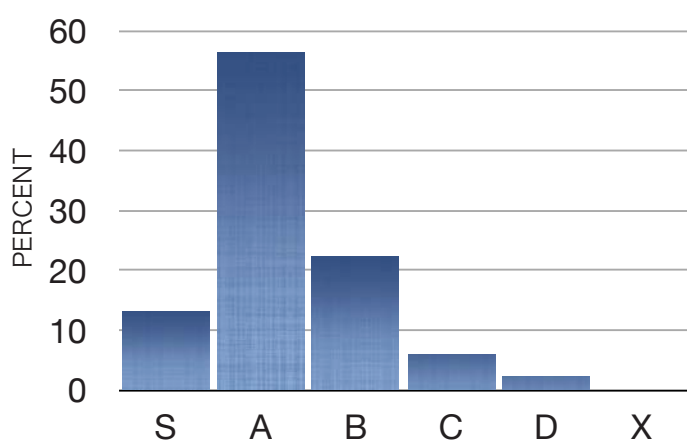
こうした背景のなか、より実態にそくして今般の 1 年次生からの GPA 導入を機会に、S 評価相当（素点成績 100 点～90 点）はクラスの 5% 以下ではなく 15% 以下を目安にするというガイドラインの変更をおこなった。また学期途中での履修取消申告制度を設けたことにより、履修放棄などによる X 判定の廃止、同判定相当の評価は不合格の D 判定にするという制度変更をおこなった。

その結果（2011 年度前期実績の範囲）は下図のとおりであった。全体に S 評価の割合が増した。これは主として 1 年次生への同評価割合が制約の緩和で増した（結果的には 13.1%）ことによる。しかし、これに伴って A 評価の割合が減少するという結果は生じなかった。ただし、A 評価が過多であつてもそのカテゴリー評価の内部で弁別的な評価がなされているなら、厳格厳正な成績評価の履行実態があきらかになるわけだから、この結果は GPA での評価結果をもって再考する必要がある。

ところで、1 年次生については X 判定がなくなったことにより、履修放棄などによる D 評価の増加が予想されたが、結果をみるとその事態は回避された。履修取消申告が適切に機能した結果とみられる。



2011 年度 前期 学士課程全体



2011 年度 前期 1 年生

(5) 成績評価 functional GPA の導入

当事業の主たる施策のひとつに成績評価指標に functional GPA を導入し、その分析をつうじて教育成果の質保証をより明確にすることがあった。functional GPA は 100 点満点の素点評価を直接グレードポイントに変換することで GPA を算定する方法である。これによりレターグレードを媒介したり、レターグレードを再点数化する GPA で発生する素点原成績との構造上の齟齬がなくなり、学生の学修パフォーマンスを精確に GP や GPA に映し見ることができるようになる。

そのため本学では 2011 年度から以下に示すように、かつて実施していた素点による成績評価を前面に戻し、これを推奨するかたちでの成績評価を実施することにした。その際、素点評価は必ずしも 100 点満点にする必要はなく、各授業科目の評価方法の性格に応じて満点と合格最低点をあきらかにすることによってどのような採点範囲でも許容できるようにし、それをシステム上で 100 点満点、60 点を合格最低点（換言すれば到達度 100 ～ 60%）に変換する仕組み（絶対的相対評価法）を導入した。

成績評価方法・基準の変遷（学年進行で適用するため 2011 年度時点ではこの 3 種の方法・基準が共存）

平成16年度以前に入学した学生の場合

成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して、100点満点、60点以上を合格とするレターグレード（A、B、C、D（不合格））による評定で評価されます。

A	80点以上
B	70点以上80点未満
C	60点以上70点未満
D	60点未満

A、B、Cは合格で、Dは不合格です

平成22年度以前に入学した学生の場合

成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して、100点満点、60点以上を合格とするレターグレード（S、A、B、C、D（不合格））による評定で評価されます。

S	基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている
A	基本的な目標を十分に達成している
B	基本的な目標を達成している
C	基本的な目標を最低限度達成している
D	基本的な目標を達成していないので再履修が必要である

S、A、B、Cは合格で、Dは不合格です

成績評価は達成度評価が原則ですが、最上位評価である S 評価については、全評価対象の 5 % 以下（評価対象者 20 人未満の場合は 1 人以下）を目安とするという適用のガイドラインを設けています。

平成23年度以降に入学した学生の場合

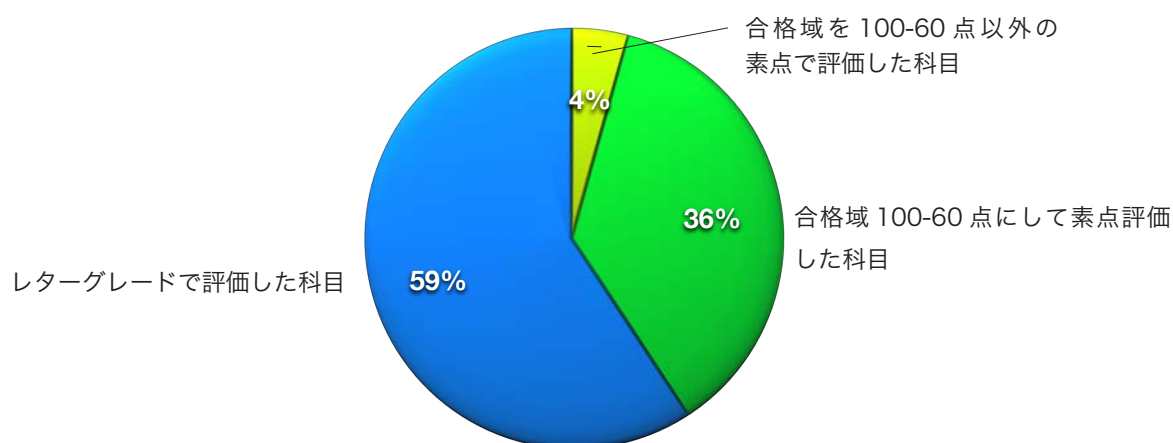
成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して、100点満点、60点以上を合格とする素点による評価またはレターグレード（S、A、B、C、D（不合格））による評定で評価されます。

レターグレードと評点区間、及び評価基準の対応関係は次のとおりです。

S（90点以上）	基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている
A（90点未満～80点以上）	基本的な目標を十分に達成している
B（80点未満～70点以上）	基本的な目標を達成している
C（70点未満～60点以上）	基本的な目標を最低限度達成している
D（60点未満不合格）	基本的な目標を達成していないので再履修が必要である

成績評価は上記の評価基準のほか、S評価を評価対象者の15%以内（履修者数が10人未満の場合は2名以下）に留めることを目安にした評価基準を設けて評定されます。履修放棄によって評定できない場合はD（不合格）となります。授業科目によって素点評価がなされる場合とレターグレードで評定される場合がありますが、後者の場合はつぎの規定により評点が定まります。 S = 95、A = 85、B = 75、C = 65、D（不合格）= 55

上記のように従前の方法であるレターグレード評価も許容しつつ、素点評価を推奨するかたちに変更したことによって、2011年度前期の実績で成績を素点評価で出した科目数は320科目となり、その全体に占める割合は40.7%であった。また、100～60点の合格範囲以外の成績範囲で素点評価した科目数は34科目で、全体に占める割合は4.3%であった。一旦レターグレード評価を標準にすると素点での評価はしにくくなるとか、できないという意見がしばしばある。しかし、この事実をみると素点評価の推奨によって4割の科目でその評価がなされたわけである。したがって、素点評価は決して困難な評価方法ではないことが確認できた。同時にこれが初回の結果であることに鑑みると、この先は素点で評価する授業科目の割合が増していくこともあろう。

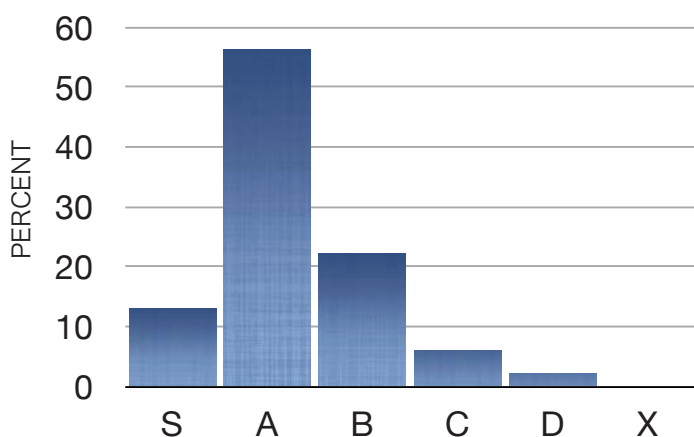


成績を素点評価した科目とレターグレード評価した科目の割合（2011年度前期学士課程全体）

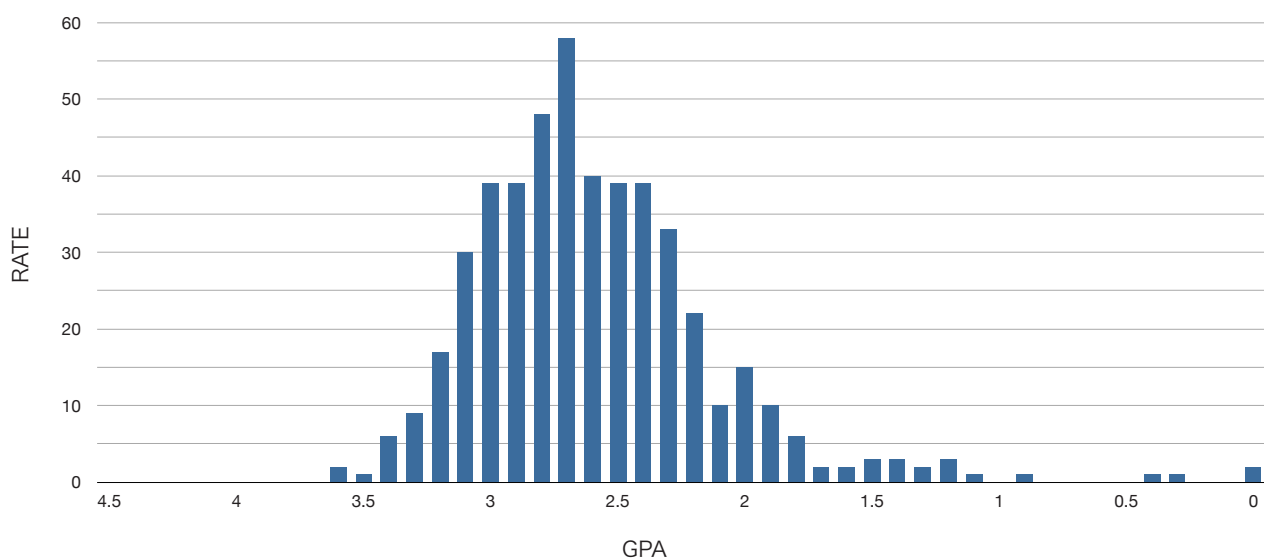
(6) 成績評価 GPA の分布から捉え直す

すでにみたように本学の成績評価のレターグレードの度数分布には高い成績評価への偏り、A 評価の過多という現象が認められた。しかし、本事業で導入した functional GPA によって、この現象がレターグレードというカテゴリー評価の丸めによって生じているアーティファクトにすぎず、実際は成績としてほぼ妥当な評価分布になっていて、とりたてて問題にする必要はないことをあきらかにすることができた。

このページの上のグラフはすでにみた 2011 年度前期の初年次生全体のレターグレードの度数割合の分布である。一見して A 評価への著しい偏りが認められる。これを素点評価をそのまま反映させた GPA の導入により GPA の区間幅 0.1 の分布で捉え直した結果が下のグラフである。



レターグレード度数分布 2011 年度 前期 初年次生全体

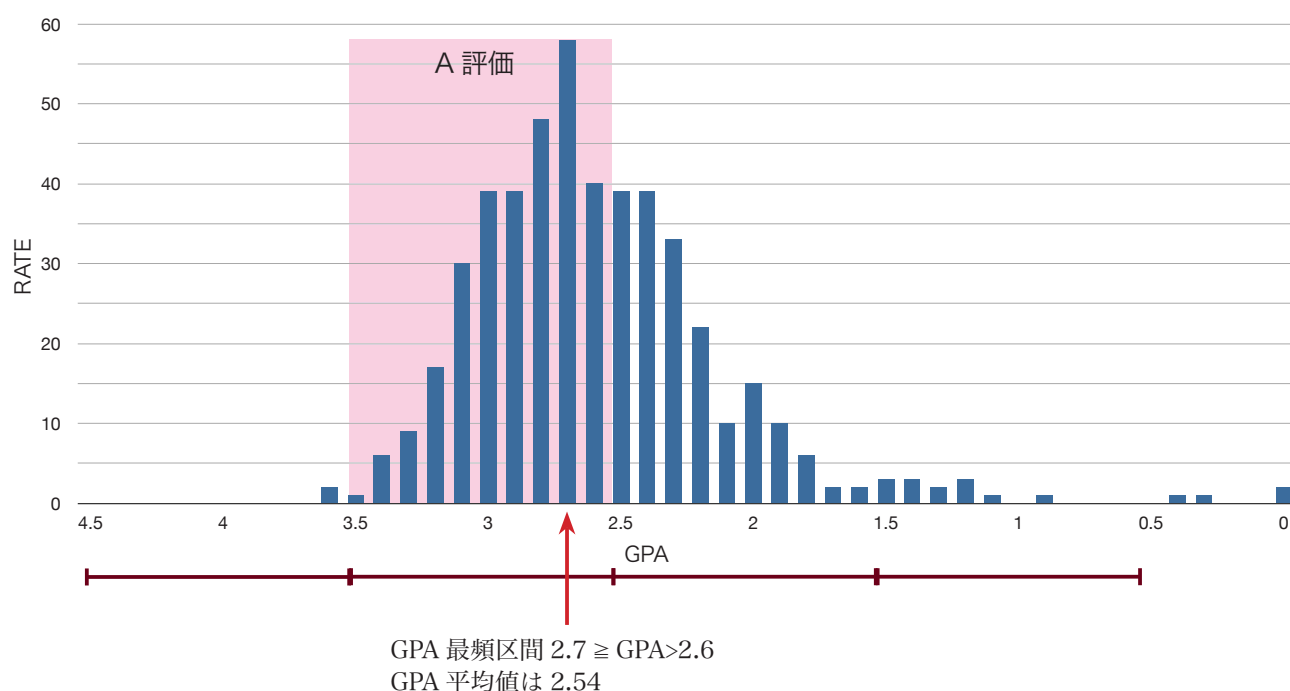


GPA 度数分布 (区間幅 0.1) 2011 年度 前期 初年次生全体

A 評価は 90 点未満 80 点以上の素点評価についてなされているカテゴリー評価である。だから、A 評価に相当する GPA の領域は 3.5 未満 2.5 以上の範囲になる。下図のようにこの範囲はピンク色で示した領域である。これをみればわかるように、同じ A 評価でも原成績は B 評価に近い方向への偏りが明白で、反対に S 評価に近い方向では極端に評価度数が低下していることがわかる。最頻値 GPA 区間は $2.7 \geq \text{GPA} > 2.6$ 、これを中点であらわせれば 2.65、素点では 81.5 点になる。原成績の合格範囲は 100 ～ 60 点であり、その中点は 80 点であるから、この GPA であらわされた成績分布は合格範囲の中点近くに評価の最頻値をもち、それを中心に左右対称とはいえないまでも単峰性の分布を示していることがあきらかになった。なお、この GPA 中点区間 ($2.7 \geq \text{GPA} > 2.6$) よりも高い評価領域での度数割合は全体の 39.5%、低い評価領域の割合は 48.5% であった。決して高評価に偏っているわけではないことがわかる。また、全体の GPA 平均値は 2.54 であった。この値は素点成績でいえば 80.4 点であり、合格得点域のほぼ中点に相当する。

以上より、functional GPA でみることによってレターグレードで見いだされた高評価への著しい偏りは実際は大まかなカテゴリー評価でみているための見かけ上のものにすぎないことが確認された。成績評価の実際はわずかながら高得点方向への偏りは否めないものの、原成績の評価としては憂慮すべきアンバランスはなく、厳格厳正な成績評価という観点からして妥当な評価がなされている事実をあきらかにすることができた。

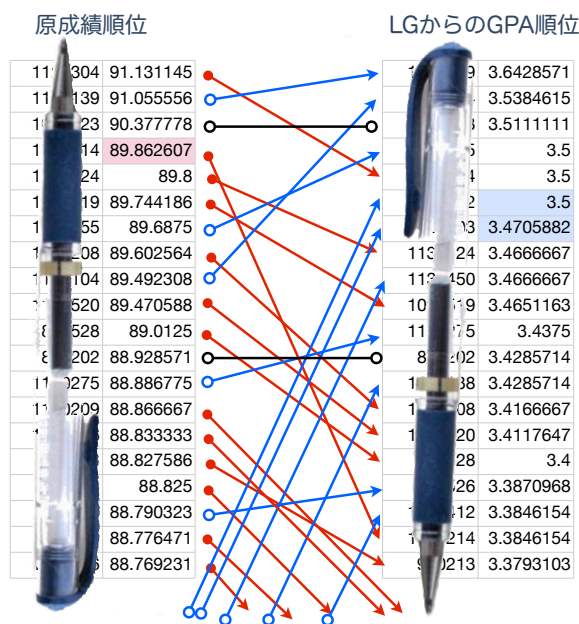
なお、functional GPA では合格最低点である 60 点のとき、グレードポイントは 0.5 となり、GP についての合格最低点は 0.5 となる。だが、GPA では履修した科目が合算され、しかも単位数が関係づけられながら加重平均化されるため、履修した授業科目の成績プロフィールによっては GPA の値は 0.5 未満になることも生じてくる。履修したすべての成績が不合格であった場合、GPA は 0 となる。



(7) 成績評価 functional GPA の効能

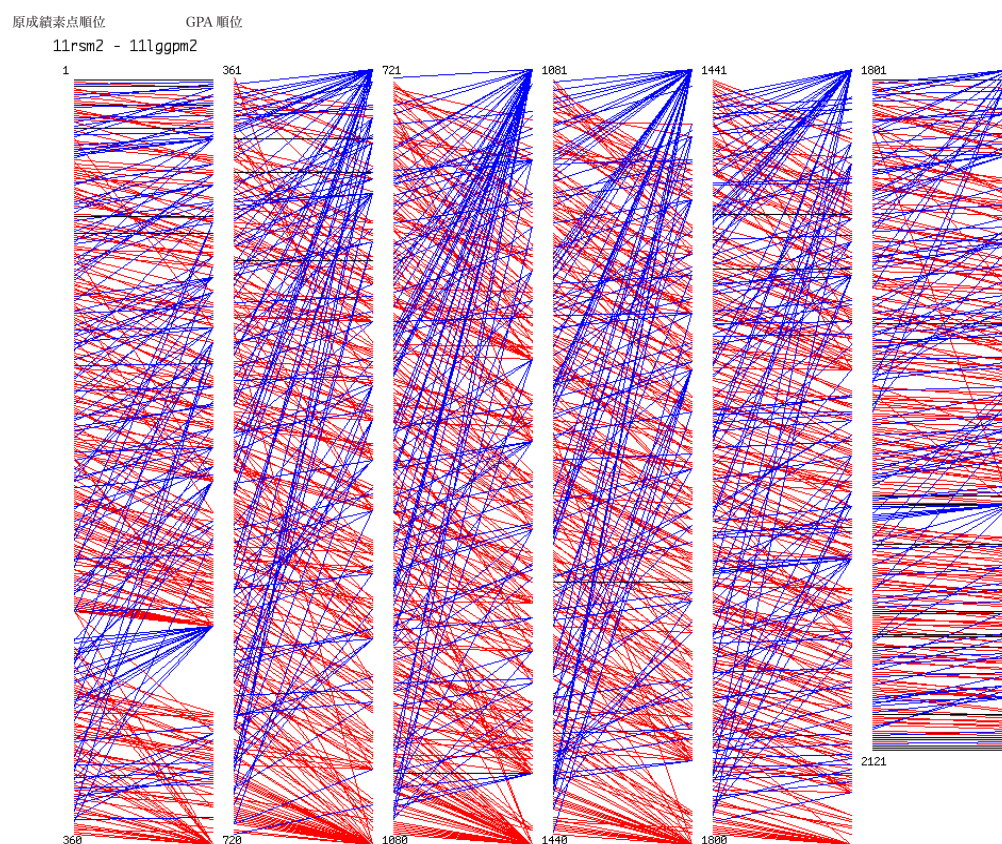
成績評価指標に functional GPA を導入したことによってもたらされた顕著な効果のひとつは、各授業科目で教員が評価した原成績の構造がそのまま GPA 値に反映され表現されるようになったことである。したがって、典型的には原成績での順位と GPA での順位は当然のことながら完全に一致する。実際に 2011 年度前期の成績で検証したところ、右ページ下図に示すように完全な一致をみた。そのため、GPA 値を用いて成績優秀者の表彰を実施したり、何らかの選抜をおこなったり、日常的にも的確な学修支援、指導が不安なく実施できることになった。

GPA は一般にはレターグレードからグレードポイントを適用する方法（たとえば、S を 4、A を 3、B を 2 ……）がとられる。しかし、この方法では素点で評価された原成績における構造（順位）と GPA によって定められる構造（順位）が異なってしまう。この変動の様はすでにシミュレーションで示されてきた（半田,2012）が、2011 年度前期の成績をもとに検証したところ、もし多くの大学で用いられているその方法を使った場合、全学上位 20 位の範囲では下図のとおり、学士課程同期の成績評価対象者 2121 名全体の範囲では右ページ上図に示したように大きな順位変動が生じる事実が確認された（順位の変動が生じた割合は 98.6%、10 位以上の変動が生じた割合 78.6%、最も大きな変動が生じたケースでは原成績順位より GPA 順位が 609 位下落したケースがあった）。むろん、本学では functional GPA を導入したことにより、こうした変動がまったく生じない GPA 指標（右ページ下図）を運用することになった。



取得単位数20以上

原成績素点（100 点満点）での平均点上位 20 位と LG から求めた GPA 上位 20 位の順位齟齬の様子 2011 年度 前期 学士課程全体（学籍番号が表示されているため、その部分をペンで蔽っている）両指標の比較にあたっては不合格科目を除き、科目による単位数の相違は平準化して算定してある。



原成績素点順位と LG から求めた GPA 順位の齟齬の様子（本学における実際のデータを用いて求めたが実際にはこの GPA 指標は用いていない） 2011 年度 前期 学士課程全体



原成績素点順位と functional GPA 順位の完全一致の様子（途中あいだが空いている部分は同順位が存在したことを示している） 2011 年度 前期 学士課程全体

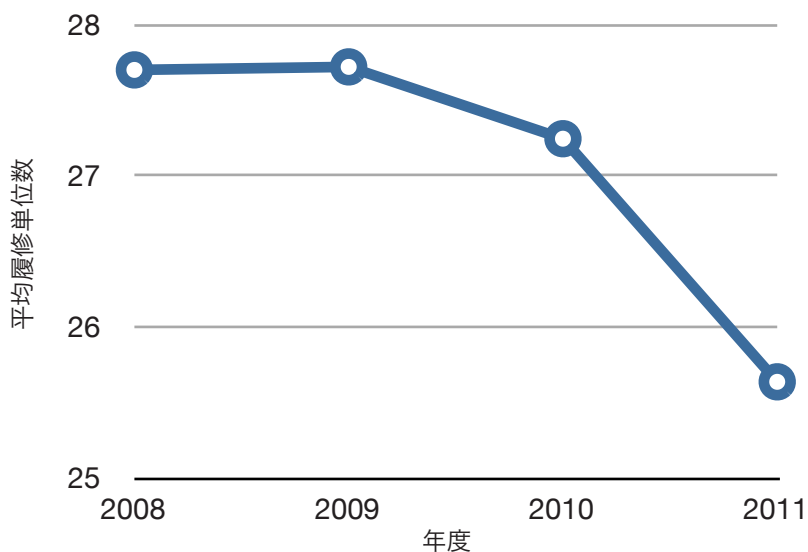
(8) 履修単位数と単位制度の実質化

本学では全般に履修単位数、および取得単位数が多め（2010 年度データで 4 年次修了時点での平均履修単位数およそ 143）であり、とくに初年次、2 年次において単位制度の実質化から乖離している状況（同年度データで 2 年次修了時点の平均履修単位数はおよそ 100）にある。むろんこうした傾向は本学特有のことではなく日本の大学全般に共通していることである。それを受けて大学設置基準にも履修単位数の上限を定めることが努力目標として記されるようになった。だが、同時に同法では成績優秀者にはその上限を超えた履修を認める措置をとるようにも記されており、具体的に上限数をいくつにするかを含め、現実的には一律の上限を定めることにはやや無理が伴っている。

本学ではすでにみたように全般的な成績状況は基本的な到達基準を十分に満たしたパフォーマンスが示されており、その上で履修単位数の過多が認められているわけである。したがって、現実的にはたとえば学期あたり 20 ～ 21 単位といった上限設定をおこなうことは 1、2 年次生はもとより、その影響を受ける高年次生にとっても手荒な措置になってしまう状況にある。

そこで履修単位数の上限を設定するよりも、あらたに導入した GPA 制度の仕組みを周知することによって、必要以上に科目履修をすることは GPA 値を低下させる危険性が余計に増すことを適正に認識してもらうことで、本当に必要とする、あるいは履修を望む授業科目を履修してそれらの学修に注力するよう伝えることで自主的、穏当なかたちで単位の実質化を果たしていくという方策をとった。

その結果、現時点では 2011 年度前期のデータしか得られていないが、下図に示したように初年次学生についての前期実績の比較でここ 3 年間、平均 27 単位台で固定化していた履修単位数が 2011 年度は平均で約 2 単位減少し、25.6 単位となった。今後、後期・通年データやその先の推移をみていく必要はあるが、「穏当なかたちでの単位の実質化」はほぼ狙いのとおり実質化する方向にあるとみてよさそうである。



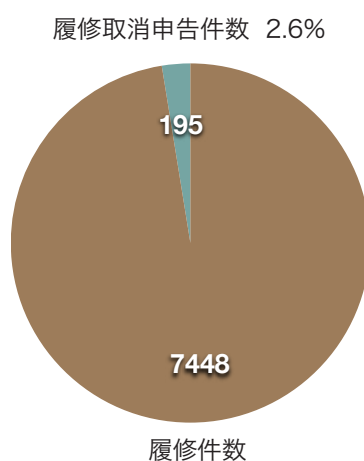
初年次生前期の学年平均履修単位数（教職関連科目および履修数 0 のケースを除く）

(9) 履修取消申告制度の実施

GPA 制度の導入と素点による成績評価の推奨に伴い、従来レターグレード評価としてあった「X」（履修放棄等による評価不能）を 2011 年度の初年次生からなくした。それに伴い履修登録したものの実際の授業を受けるなかで履修を取り消したい場合が生じたときは一定の期間に履修取消の手続きを web をつうじて学生自身がとれる履修取消申告制度を導入した。この手続きをとらずに履修放棄をするなどして成績評価ができなくなった場合は不合格判定となる。

この制度を導入した結果、2011 年度前期の実績で初年次生が履修した科目数は 304 科目、そのうち履修取消申告があった科目数は 102 科目、割合にして 33.6% の科目で同申告があった。これを履修件数でみると、初年次生の総履修件数は 7643、総履修取消件数は 195 であったから、全体の履修取消率は 2.6% ということになる。

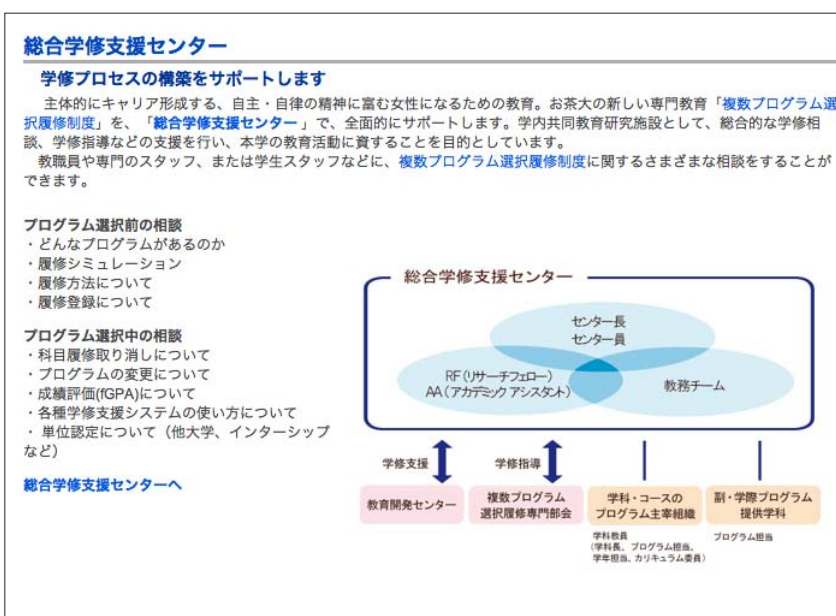
この取消割合の妥当性だが、最も懸念されたことは適切な取消申告手続きがおこなわれず結果的に不合格 D 判定が例年より増加するという事態であった。しかし、結果をみると初年次生の 2011 年度前期の不合格 D 判定の割合は同年次生全評価の 2.2% に留まり、例年より若干の増加傾向が認められたものの、大きな変化は生じなかった（2010 年度 1.3%、2009 年度 2.0%）。また、従前の初年次生の X 判定は 2009 年度に 3.9%、2010 年度に 3.3% であったから、例年、最終的に履修放棄によって曖昧なかたちで評価不能になっていた成績評価の割合がほぼ能動的、明示的な履修取消申告手続きによってそのほとんどが解消されたといえる。以上より、履修取消申告手続きは妥当なかたちで進み、同制度は目的どおりに機能したとみることができる。



2011 年度前期の初年次生による履修件数と履修取消申告件数

(10) 総合学修支援センターの設置

当事業の3本柱のひとつ、総合学修支援センターと学修支援情報システムのうち、センターは一連の協議プロセスを経て2011年度(事業最終年度)4月に、学内共同教育研究施設として、総合的な学修相談、学修指導などの支援にあたることを目的に、学生センター棟1階の101室に開設された。同センターは総合学修支援センター規則と全学教育システム改革推進本部の管理のもと、総合学修支援センター会議によって運営されている。センターは月曜から金曜の8時30分から17時まで開設され、隣接としている教務チームとの連携のもと常態的にはアカデミックアシスタント3名からなる相談員(ピアサポーター)が来談する学生への対面サービスにあたっている。



総合学修支援センターのウェブサイトより



総合学修支援センターでの相談風景

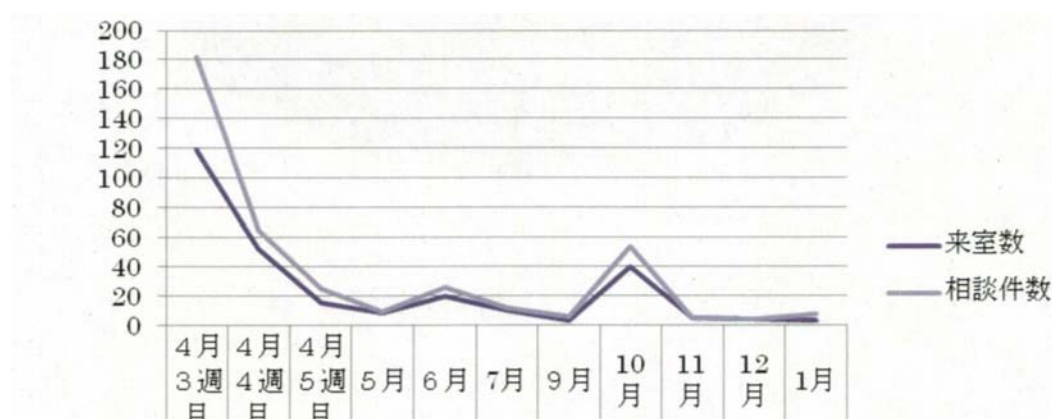


総合学修支援センターの入口

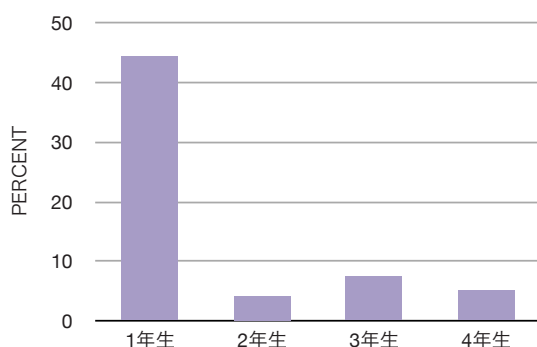
同センター開設初年度の1月までの統計によると、学生の学修に関する相談内容で最も多かったのは授業科目履修に関することであり、来談件数は4月が極端に多く、つぎに後期の履修登録時期、つぎに試験期間時期というはっきりとしたパターンがみられた。

今回の特殊事情として複数プログラム選択履修制度という本学において未知のあたらしい取り組みに対応し、その相談にも応ずる役割があったから、業務はオン・ザ・ジョブで学びながら進まざるを得なかった。そのためセンターの存在アピールはこのプログラム選択履修が導入される初年次生を中心におこない全学的に広報することは控えめにして、開設年度は学修相談のノウハウを蓄積することが優先された。

2011年12～翌1月にかけて実施した学修支援（システム）に関する学生アンケート調査の結果（本報告書3-1に詳細を載せた）では下図に示すように総合学修支援センターに対する認知が初年次生に著しく偏ったが（4～1月のセンター来室統計でもみて来室者の89%が1年生であった）、これは上記の理由による。しかし、来年度以降はこの初年次生が2年生になり、複数プログラム選択履修制度やGPAでの評価も学士課程の半数で実施されることになる。したがって、学修支援センターに対する需要も存在価値も高まっていくことが予想される。



開設年度の4～1月における総合学修支援センターへの来談数と相談件数の推移
（会議資料より）

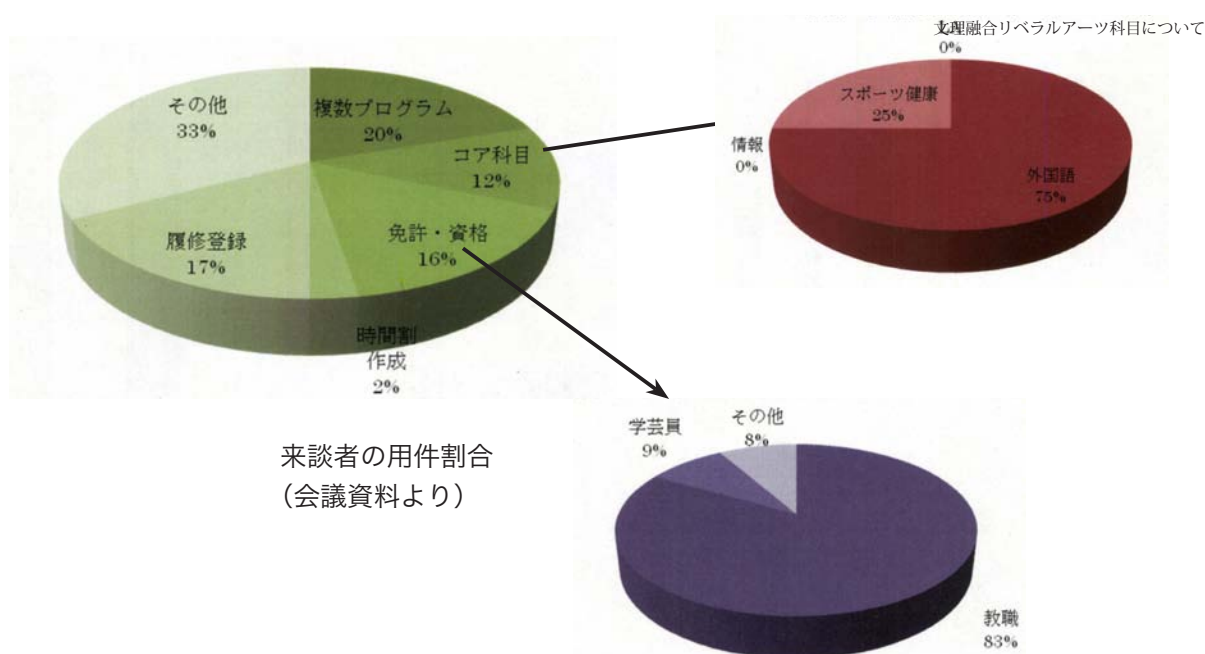


総合学修支援センターに対する学年別認知率（2011年度
学修支援（システム）アンケート調査より）

(11) 総合学修支援センターの機能

総合学修支援センターは同センター規則により、全学共同の施設として具体的には複数プログラム選択履修、ファンクショナル GPA 制度、カラーコードベンチマークシステム、学生の学修を支援するシステムなどについて総合的な学修相談に応じることをその機能として位置づけた。

2011 年度 4～1 月のセンター統計による相談内容の割合内訳は下図のとおりであった。科目履修に関連することがらを中心に多岐にわたっていることがわかる。これらの内容を学修支援（システム）に関するアンケート調査で得た来談内容についての回答結果をもとにもう少し具体的にみると、つぎのとおりであった。



【Q】総合学修支援センターをどのような用件（質問・相談内容）で利用しましたか

【A】（全回答について類似内容をある程度まとめた結果）

- ・履修の件（生活 1 年生）
- ・履修について。（理学 1 年生）
- ・履修についての質問。（生活 1 年生）
- ・履修についての相談（文教 1 年生）
- ・前期の履修科目の選択について。（文教 1 年生）
- ・履修方法について（学芸員資格、外国語）、Web 履修登録での問題発生（文教 1 年生）
- ・科目や履修登録の方法、また教職課程などに関する質問と相談。（理学 1 年生）
- ・履修登録で不明な点があったので質問しに行きました。確か、コア科目と学科共通科目のバランスについてだったと思います。（文教 1 年生）
- ・前期に、履修の手引きと時間割に書いてある内容が違うという質問をした。（生活 1 年生）
- ・時間割のつくり方。（生活 1 年生）

- ・時間割の組み方について (文教 1 年生)
- ・時間割の立て方についての質問 (理学 1 年生)
- ・前期では初めてのことでしたので時間割の要領がわからず不安でした。自分の時間割がおかしいかチェックしてもらいました。(文教 1 年生)
- ・前期の時間割の決め方を相談した。(どの科目を優先的に取るべきか、週に何コマ程度入れるべきか、教職との兼ね合いについて等) (文教 1 年生)
- ・時間割をチェックしてもらうため。社会調査士の資格の授業のとりかたについて (文教 1 年生)
- ・履修放棄についての質問。(文教 2 年生)
- ・成績開示や TOEIC のスコアの受け取り。履修に関する質問。(生活 1 年生)
- ・自分が受けた講義の対象学年ではないと知ったとき、相談にいったら受講可能にしてくれた。(生活 1 年生)

これらの要件で来談した結果、問題が解決したとする回答は全体の 84.2% であった。解決しなかったとした回答は 3 件あった。それらのその後の解決の道筋は「他の人にたずねた」「履修に関しては、担任の先生に相談し、明確な答えが得られた」「解決しなかった」であった。

利用者の総合学修支援センターに対する満足度は、たいへん満足が 5.2%、満足が 79.0%、満足していないが 15.8% で、概ね良好な結果が得られた。同センターを利用して感じたこと、改善点の指摘（全回答）を、それぞれの満足度の評価と共に、つぎに載せておく。

- ・スタッフの方がとても丁寧に対応してくださり、大変助かりました。(理学 1 年生 満足度：たいへん満足)
- ・分からないことをすぐ聞ける場があるのはいい。(特に 1 年生は最初とても不安なので) (生活 1 年生 満足度：満足)
- ・相談員が少ないので混雑していました。特に利用者が増えそうな 4 月や 10 月は相談員を増やした方がいいのではないかと思います。(文教 1 年生 満足度：満足)
- ・全体のオリエンテーションでも聞いたことと同じような回答も多かった。どんな質問にも対応してくれてありがたかった。(理学 1 年生 満足度：満足)
- ・どこまで相談して良いのか、あまりよくわからなかった。(生活 1 年生 満足度：満足)
- ・初めて自分の時間割を自分で決めなくてはならず、色々と不安なことが多かったので、相談できる人がいて良かった。(文教 1 年生 満足度：満足)
- ・雰囲気あまりよくない (文教 1 年生 満足度：満足)
- ・訪ねた科目に関して、『開講科目の冊子』ではなく、PC を用いて一緒に確認できれば早くなって効率もよいと思う。(生活 1 年生 満足度：満足)
- ・聞く人によって答えがばらばらで、誰の言葉を信じればよいかわからなかった。(文教 1 年生 満足度：満足していない)

(12) 授業・学習支援システムの構築と運用

学生の学修を総合的に支援するシステムのひとつとして、日常の授業と授業時間外を含む学習を支援する仕組みとして、本事業では情報技術を用いた 24 時間利用可能な授業・学習支援システムの構築と運用にあたった。

これに関する主たる背景と課題はつぎのとおりであった。ひとつはすでに本事業の開始以前に本学では 2 つの同機能をもつシステムが運用されていた。ひとつはオープンソースをもとにカスタマイズされた Moodle システムであった。これは教材の配布、レポートの受付、自習システムの構築、ネット上でのディスカッション、フォーラムの構築、ミニテストの実施などを学外からも可能にした 24 時間稼働のシステムである。この Moodle は本学の外国語教育センターが情報基盤センターと協力して構築にあたったもので、その経緯から語学科目を中心に授業時間外学習などですでに効果的な運用が進められてきている。同システムは現在、学内で開講されているすべての授業で利用できる状態になっている。ただし、そのすべてとはいわないまでも利用授業が増えた場合の各種サポートにあたる人的資源が手当てされていないこともあり、英語を中心とした語学科目以外には積極的な利用が促されがたい状況にあった。

これを補完する意味もあって本事業開始時点ではもうひとつ外部資金にもとづきキャリアレポート放送局という名称の同様のシステムが運用されていた。こちらは語学以外の科目にも積極的な利用が促され、教材配布やネットを介したレポートの受付など授業や授業時間外学習を支援するシステムとして一定の役割を果たしていた。ところが、このシステムは学外のサーバーを利用し、システムメンテナンスも外注していたため、当該の事業期間が終わり運用費の手当てができなくなることで停止せざるをえなくなった。

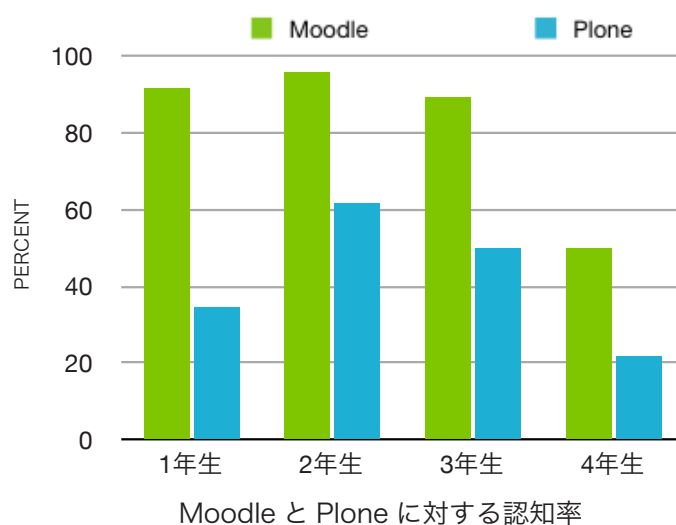
こうした背景と授業時間外学習の支援がますます重要性が増すなか、運用に特別の予算組を必要とするシステムではなく、Moodle と同様の感覚で使え、それと並行して利用できる別のシステムを構築し運用することが必要であった。そのために Moodle を拡張的に用いる手立ても考えられたが、いわゆるラーニングマネジメントシステム、コンテンツマネジメントシステムと呼ばれているオープンソースのシステムはそれぞれの特徴をもちながら、各種出回っていたため本事業ではむしろ別のシステムを用いることが Moodle を含めたこの種のシステムの運用ノウハウを蓄積するうえで有効であると判断した。

こうした背景と課題から本事業ではオープンソースの Plone を導入し、学内サーバーにおいて自主構築、開発、運用することにした。最も重視したところはこれが授業実施の基本的な支援になる性質のものであるため、本事業期間が終了したのちも長い見通しをもって特別の予算を必要とすることなく運用していけることであった。

この Plone システムの特徴や導入・運用に関する詳細は本報告書 3-3 の関連論文で紹介しているので参照されたい（同じく Moodle についても 3-4 に紹介論文を載せた）。結果的に同システムは本事業の初年度から導入し少数の授業において試験運用を開始、次第に試験的な運用を拡大してきた。この間、教職員・学生を対象にした説明会（ミニ FD）を 8 回実施し、利用マニュアルも改訂、第二版と継続的に発展させ配布してきた。その結果、本事業の終了を目前にした 2011 年度 2 月現在では約 30 名の教

員が授業で利用し、それらの授業を受講するおよそ 1000 名の学生に利用されている状況に至った。

当初の目的どおり、本システムはこの事業期間が終了後も支障なく継続利用できる状態にある。そればかりか期間終了後の年度、このシステムには学内措置による予算がつけられたため、それを利用して発展的な改善と定着を図る予定である。具体的には本学の統合認証を介した統一的なログイン手続きにより利用を可能にすることのほか、下記に示すような学生から寄せられた改善要請の多くに対応する予定である。



【Q】 Plone を一層有効に使っていくために改善点があれば教えてください

【A】 (回答のうち代表的なもの、全回答は本報告書の 3-1 参照)

- ・ Plone を授業で使う授業（たとえば、コメントシートの提出など）が少ないため、授業中に使用したレジュメを共有するためや、意見交流の場として教授が積極的に Plone を取り入れた講義をしてほしい。
- ・ 昨年度後期と今年度前期に使用したが、それぞれ ID やパスワードが異なっていたように思うので、それが一つの ID、パスワードに統一されると良い。
- ・ 昨年度の授業で使いましたが、機能が充実しており結構便利だと思いました。もっと周知のものにしたら良いです。
- ・ 使用方法の説明がわかりづらいので、もっと簡潔にしてください。
- ・ もっと多くの授業で取り扱って欲しい。先生方もご存じないのでは？
- ・ Plone を使用した授業が少ない。そのため利用方法や活用方法が分かりづらい。
- ・ レポートの提出の仕方が少し分かりにくかったです。
- ・ もっと内容を充実させて欲しい。利用できる機会が少ない。
- ・ 授業の中でもう少し紹介し、認知度を高める。
- ・ 携帯サイトがあると使いやすい。授業で使わなければ見ない。
- ・ 各学生のページから受講している講義の全ての Plone へのリンクがほしい。

(13) 学修支援情報システムの開発と構築

3-1 に示したように本事業の一環として、2011 年 12 月から翌月にかけて本学学士課程に在籍する学生のおよそ 4 割にあたる 800 名に対して学修支援（システム）に関するアンケート調査を実施した。学修支援が大学からの思い込みで一方通行の施策になってしまうことがないよう、学生が学修にあたって必要と感じているものごとを的確に読み取っておく作業は不可欠である。この調査はその目的に沿っておこなわれた。そこでの典型的な設問、

「学修支援システムが提供する情報として（すでにあるものも含めて）あったほうがよいと思うもの、大いに利用したいと思うもの」

に対する回答結果と、それに対する本事業の成果による対応をあきらかにしておく。

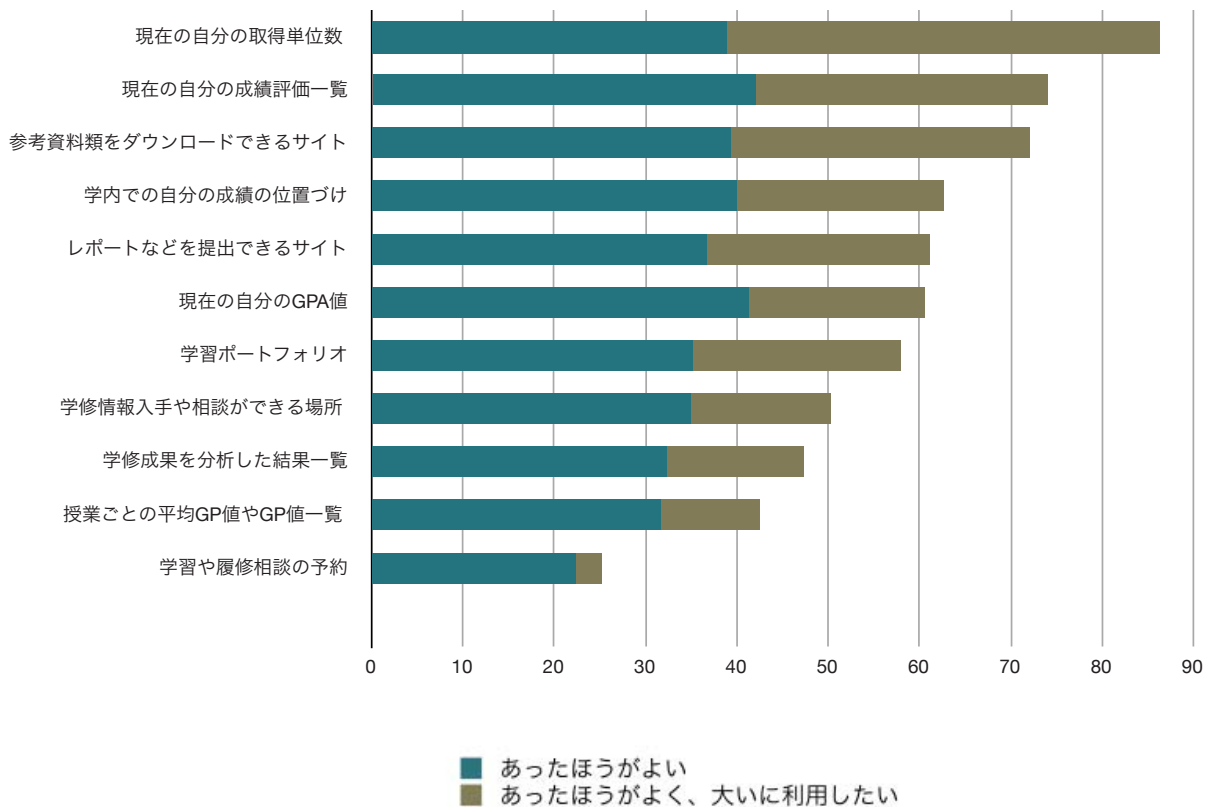
回答選択肢の項目に対する反応結果を反応率の高かったものから並べた結果は次ページのグラフのとおりであった。グラフでは表記スペースの都合で選択肢の表現を簡略化している。実際の文章表現はグラフ表記の順につぎのとおりであった。（ ）の数値は全回答数に占める反応率である。

これらのなかで記述した内容がそのままのかたちで存在していない項目に★、形式はネットワーク上ではなく紙媒体での出力になっているとか、一部だけが実現されている項目に★をつけた。記述した内容がそのままのかたちですでに存在しているものには★印がついていない。

また、本事業で開発した学修情報支援システム（alagin）（本報告書 2-2（14）参照）によって記述したとおりの内容が実現することになる項目に▶をつけた。

- (1) 認証のうえウェブ上で確認できる現在の自分の取得単位数（86.28%）★▶
- (2) 認証のうえウェブ上で確認できる自分の成績評価一覧（74.12%）★▶
- (3) 授業で用いる参考資料類をネットからダウンロードできるサイト（72.12%）
- (4) 学内や学部内での自分の成績の位置づけ（相対的なできぐあい）（62.61%）★▶
- (5) 授業で出されたレポートや課題をネットを介して提出できるサイト（61.06%）
- (6) これまでと現在の自分の GPA 値（学期ごと、累積値など）（60.62%）★▶
- (7) 学習ポートフォリオ（学習成果物（レポートなど）とそれに対する評価をまとめたファイル）（57.96%）
- (8) 今後の学修プランを立てるうえで役立つ情報が入手できたり相談ができる場所（50.22%）
- (9) 上記（学内や学部内での自分の成績の位置づけ）のような学修成果を多角的に分析した結果一覧（47.35%）★▶
- (10) 授業ごとの平均 GP 値や最大、最小 GP 値一覧（42.48%）★▶
- (11) 学習や履修に関する相談予約（25.22%）★

上位 3 項目については回答者の 7 割以上が必要性を訴えている。このうち上位 2 項の取得単位数や成績一覧は現状では以下の「その他」に対する記述回答にもあるように、成績通知票や証明書を紙媒体



学修支援システムが提供する情報としてあったほうがよいと思うもの

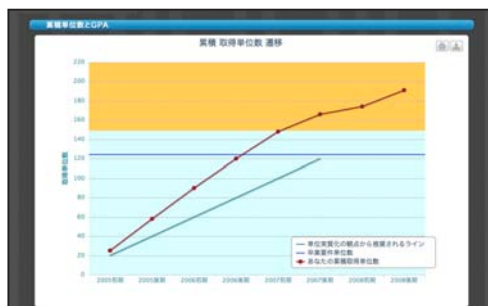
で出力ないし窓口受け渡しで確認している状況にあり、学生からするとやや不便に感じている様子がうかがえる。ネットワークシステムが確立した現在にあっては人手、維持管理にも無駄がみられるところである。これらは本事業で開発した alagin によって本人認証を経て確認できるようにした。それにより今後は学生からの要求に応えられることになる。

つぎに 6 割の学生が必要性を認めている「学内や学部内での自分の成績の位置づけ」。これはこれまででは知る手段がなかったが、今後は成績や取得単位の状況確認とともにいつでもチェックできることになる。

全回答者の半数以上が必要性を示したことがら（上位 8 項目）の実現がどのように可能か、つぎに示しておく。

(1) 認証のうえウェブ上で確認できる現在の自分の取得単位数 (86.28%) ★▶

2-2 (14) に示した alagin システムによって学生は学期ごとの取得単位数や登録単位数を単位数の実質化が果たせる基準ラインとの比較をつうじて随時チェックできるようになる。



(2) 認証のうえウェブ上で確認できる自分の成績評価一覧 (74.12%) ★▶

alagin システムによって学生はいつでも自分の現在の成績評価の状況を授業科目ごとにその授業の GPC や GP 範囲などとともにチェックすることができるようになる。

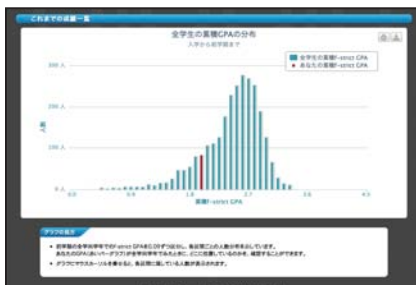
科目名	年度	学期	LE	Student GP	General GP	Student GP 詳細
現代社会学	2005	2	X	0.00	0.00	[Chart]
法理学(基礎)	2005	2	X	0.00	0.00	[Chart]
法理学(応用)	2005	2	X	0.00	0.00	[Chart]
経済学入門	2005	2	C	1.00	1.00	[Chart]
現代社会学	2005	2	X	0.00	0.00	[Chart]
現代社会学入門	2005	2	X	0.00	0.00	[Chart]
文化人類学	2005	2	X	0.00	0.00	[Chart]
基礎統計	2005	2	A	3.00	3.00	[Chart]
基礎統計発展	2005	2	A	3.00	3.00	[Chart]
基礎統計II	2005	2	B	2.00	2.00	[Chart]

(3) 授業で用いる参考資料類をネットからダウンロードできるサイト (72.12%)

2-2 (12) に示した授業・学習支援システム moodle、および plone の 2 つのシステムにより実現されている。今後はこれらを用いる授業を増やすことや使い勝手を一層改善していくことが課題である。

(4) 学内や学部内での自分の成績の位置づけ (相対的なできぐあい) (62.61%) ★▶

alagin システムによって学生はいつでも自身の GPA の位置づけを全学や学部内での GPA 度数分布のなかで捉えることができる。これらのほか、科目分類別、プログラム別、カラーコードベンチマーク別にも成績の相対的な位置づけをモニターできるようになる。

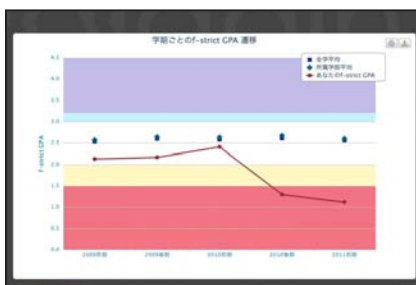


(5) 授業で出されたレポートや課題をネットを介して提出できるサイト (61.06%)

これも授業・学習支援システム moodle、および plone の 2 つのシステムにより実現されている。今後これらの使用勝手を一層改善していくことが課題である。

(6) これまでと現在の自分の GPA 値 (学期ごと、累積値など) (60.62%) ★▶

alagin システムによって学生は随時自身の GPA の学期ごとの推移、累積値の推移をチェックすることができるようになる。



(7) 学習ポートフォリオ (学習成果物 (レポートなど) とそれに対する評価をまとめたファイル) (57.96%)

授業・学習支援システム plone によって簡易的なかたちで実現されている。また、文理融合リベラルアーツ科目では LA ファイルという名称で物理的なファイリングを用いた学習ポートフォリオを 2012 年度から全学生に配布し、その成果を評価する計画にある。

(8) 今後の学修プランを立てるうえで役立つ情報が入手できたり相談ができる場所 (50.22%)

2011 年度から総合学修支援センターによって実現されている。今後はこの調査結果なども踏まえて支援、相談業務を一層充実していくことが課題である。

つぎに別の設問では「理想的な学修支援のためのシステムのイメージ」について自由記述を求め、その内容に対する回答者の利用意向を選択肢により回答してもらった。その結果、それを「大いに利用する」とした回答は 32 件（全回答の約 12%）あった。これらは学生からの直接的な要望でもあるから、無理のないものには積極対応すべきといえる。なかには現況のシステムを多少改善することで対応可能なものやすでに整備されているのだが、単にその存在が知られていないもの、あるいは本事業で開発したシステムによって実現されることになるものも含まれている。

ここではその全回答とそれらへの対応についてコメントしておく。

- ・自身の履修科目に関して、web 上で一括管理できる状態。例、レポートや課題提出とその提出状態の確認。そのページに行けば履修科目に関する情報（例、休講情報）だけが表示されると便利。（文教，3）▶ 本事業で開発した alagin によってこの要望はほとんど満たされる。自身の時間割データに休講情報を提示する仕組みはその必要度の高さに応じて今後の対応課題と考えている。
- ・インターネットで利用できる情報サイト。（理学，1）▶ 具体的なイメージが明確ではないが、本事業で開発した alagin はこれに相当するだろう。
- ・講演会などの情報提供の場（生活，1）▶ すでにそうしたサイトは存在しているが、統合的に管理するサイトが必要であることは確かであり課題である。
- ・ネットで何でも分かる、何でもできるシステム（理学，1）▶ 何でも、となると無理な要望になる。
- ・24 時間体制であること、ネットを活用している、自分の学修における不安を解消してくれる（文教，4）▶ alagin がなかったこれまでとこれからはこの点において大きく変化するはずである。
- ・チューター制度、相談できる先輩を一人一人につけて欲しい。（理学，3）▶ チューターというよりも学修に関するピアサポートは総合学修支援センターにおける今後の業務の核となるはずである。
- ・将来希望する職種や資格をとるにあたって、必要と考えられる知識が得られるよう、アドバイスできるようなシステム。また、その職種や資格に関する情報が得られる。（理学，4）▶ alagin の発展型のひとつとして課題に加えたい。
- ・せっかく Moodle というシステムがあるのだから、生徒により今の自分の成績を分かりやすく告げたり、参考資料、学会資料の提供もネットで大いに活用すべき（理学，1）▶ システムの活用普及活動を展開することで対応する。
- ・コンピューター（自宅の物）を介した登録や申請ができること（生活，4）▶ 対応済みだが一部機能について学外からの利用が制限されるのは利用を拡大したときの問題発生とのトレードオフについて利用者（学生）を含めた検討と同意が必要なところだろう。
- ・ポータルサイトに履修した科目名、成績、取得単位数、そしてこれから必要な単位数をカテゴリ別に表示してくれるシステムを乗せる。（文教，2）▶ alagin によって実現される。
- ・個人それぞれへの細かい対応（理学，1）▶ alagin や総合学修支援センターなどによりそれに向けて

整備中。

- ・一人ひとりのニーズに合った履修科目を示して、取り忘れないようなシステム（生活，1）▶ [alagin](#) によって実現される。
- ・学生を主導していくのではなく、うしろからでも力強くサポートしてくれるシステム。（文教，1）▶ [alagin](#) や総合学修支援センターなどによりそれに向けて整備中。
- ・文教育学部2号館のピアノの練習室の数が増え、調律ができているピアノがそろった状態が良い。（文教，1）▶ 当該の部門へ。
- ・相談しやすい環境（文教，4）▶ そのように整備。
- ・学生ひとりひとりに合った学修の仕方、学修の内容を考えてくれる。（生活，1）▶ [総合学修支援センター](#)や[alagin](#) サポートで対応していく。
- ・携帯のメールにセミナー情報、休講情報、教室変更、奨学金などのお知らせが送信されるシステム。（理学，1）▶ [すでに Ocha mail で対応している部分もあるが、個々の状況にあわせてのメールサービスが適切かどうかは考えどころであり、この点はポータル情報で対応すべきと思われる。](#)
- ・インターネットのサイトを通じて、様々な情報や資料を自由に入手できるシステム（理学，1）▶ [学修支援情報については alagin によって実現される。](#)
- ・大学で学修できることがらを体系的に知ることができる。その中でどの分野を自分が専攻していくのか分かりやすくする。開講科目の情報を充実させ、自分が学びたいと思う授業がとれるようにする。授業名や学部、学科名そのほかのネーミングを考慮し、容易に分かるようにする。学生の学修意欲を高めたり尊重する雰囲気。全体的に情報公開を充実させ開かれたイメージ、（文教，1）▶ [総合学修支援センターや学科・コースの学修相談窓口、あるいは alagin などに対応していく。](#)
- ・自分でたてた目標と、現状との違いが一目で分かり、到達を実感していくことができるようなシステム（生活，3）▶ [alagin とその発展型によって相当程度、実現されていく。](#)
- ・個別のアドバイザーが、個人個人の将来を見据えて履修を考えてくれる（生活，3）[総合学修支援センターや学科・コースの学修相談窓口がその支援をおこなっていく。](#)
- ・教職免許の取得や留学の有無を含めた四年間の履修の目安の相談や、具体的にどのような時間割になるのかのモデルや試算が出来るシステム。あるいは、就職のためにどの程度の評価やどのような内容の授業を取ることが望ましいかを示してくれるシステム（文教，3）▶ [総合学修支援センターや学科・コースの学修相談窓口、あるいは alagin やそのサポートが役立つことになる。](#)
- ・手軽に自分の状況や重要な情報を確認できるシステム。（成績含め）（文教，2）▶ [alagin によって実現される。](#)
- ・学科の先輩とのつながりがなく、研究室をどのように決めるのかなど、重要であるにもかかわらず、知らないことが多いので気軽に質問できるシステムがあったら嬉しいです。しかし、大学生なので自分でそのようなことを行うことが当たり前なのかなと感じていたりします。（理学，2）▶ [総合学修支援センターや学科・コースの学修相談窓口、あるいは alagin やそのサポートが役立つことになる。](#)
- ・自分の興味を持った先生や分野の論文などが読める。（文教，1）▶ [実現されている。](#)
- ・24時間利用できる学習室と生協。進路相談を気軽にできるコンサルトルーム。各大学の大学院について手軽にわかるサイト。論文をすぐに入手できるサイト。webcat や endnote など知らない人もいる

- システムを一覧にして利用方法を見られるリストなど。(文教, 2) ▶ 施設の 24 時間利用は困難としてもその他については実現済み、あるいは整備可能。
- ・自分の専攻とは異なる授業などで、受けた方が良いものを紹介してくれる。(理学, 4) ▶ 総合学修支援センターである程度、相談できる。
 - ・明快。誰でも知っている。どこからでもアクセスできる。統一されている。(文教, 2) ▶ alagin によって実現されるが、上述した理由でアクセスについては学内からならばどこからでも、でスタートする。
 - ・学外からのアクセスが可能。(生活, 4) ▶ 上記のとおり。
 - ・使いやすい、使い慣れている。(理学, 3) ▶ alagin によって実現される。
 - ・教授と大学がより密接に結びついて、学生をサポートするイメージ。(その授業で出されている課題が大学の HP で見られるなど) (文教, 1) ▶ 個々の教員の課題。後者については授業・学習支援システムにより実現可能。
 - ・4 年間を通しての計画や、これまでの成果をまとめて個人が管理していくことができるシステム。(生活, 4) ▶ alagin とその発展型によって実現される。
 - ・学生が受けた新しい授業を、大学に注文して授業にすること。(理学, 1) ▶ 今後の課題。
 - ・基本ができていない人がいるとまったく授業が進まないの、基本や前の授業の復習が各個人できるシステム。(生活, 3) ▶ 今後の課題。自習システムは授業科目によって実現済み、今後も増えるはず。
 - ・履修科目、単位取得に関して、あらゆる取得パターンを網羅的に理解している相談場所(人)があれば良いと思う。(自分が考えた取得パターンで大丈夫かどうか確認できれば安心して取り組めるから) (文教, 3) ▶ 総合学修支援センターでかなりの程度、相談できる。
 - ・学内外でも、いつでもしたいときに勉強できる環境を支援してくれるシステム。(生活, 2) ▶ 授業・学習支援システムはそこに向けて整備中。
 - ・SNS でのお茶大のページ。(文教, 1) ▶ Facebook は対応済み
 - ・使いやすい。いつでもどこでも使用可能。(文教, 2) ▶ そこに向けて整備中。
 - ・欲しい資料・データがあること、その収集に必要な機器(パソコンなど)が提供されること(理学, 4) ▶ 授業・学習支援システム、および施設設備はそこに向けて整備中。
 - ・24 時間、いつでもどこでも ID があれば使用できるシステム。校内で安心して過ごせる(昼夜問わず)こと。(文教, 4) ▶ 授業・学習支援システムは対応済み。
 - ・知りたいと思ったらまずはそこにアクセスしてみようと思うような情報提供、教師と学習者のパイプ(文教, 2) ▶ 整備の目標はそこにおかれている。総合学修支援センターはまさにそのパイプになる。
 - ・授業の進捗を教えてくれるサイト(内容、使ったスライドなど)(生活, 1)
 - ・自分の位置を知ることができる(理学, 2)
 - ・大学内や学部内での自分の位置(成績や経験値など)を知ることができるようなシステム(理学, 2)
 - ・学外からでも、豊富な情報が得られるシステム。一つの独立したサイトの形になっていると便利。(文教, 2)
 - ・成績評価や過去のレポート、大学のおしらせなどの情報にマイページから直接アクセスでき、問い合わせや相談フォームなども充実している web システム。(文教, 3)
 - ・気軽に誰でもいつでも利用できる(文教, 1)

- ・ (8) のその他に書いたようなもの。(文教, 2)
- ・ 休講情報が自動転送されてくる。(文教, 3)
- ・ 自主的な学習が行えるよう、あくまでサポーターティブである。システムの存在が周知されている。どこでも利用できる（認証されれば）(文教, 3)
- ・ 総合的な（クラスの）成績の開示（文教, 1)

(14) 学修支援情報システム alagin

ここまで何度か言及したように、本事業ではその基幹事業のひとつとして、総合的な学修支援の一環として、本学にこれまで存在していなかった学修支援のための情報システムの開発をおこなった。同システムは本事業の最終年度に入る段階で当初の計画どおり、公開前の試験運用版の完成に至り、事業最終年度にこのプロトタイプを用いて非公開の試験運用と調整作業をおこなった。その結果完成に至ったシステムの概要はつぎのとおりである。

このシステムの目的

本学が掲げる学生主体の多角的な学士力養成という教育課題に直接的に適合し、文理融合リベラルアーツや複数プログラム選択履修制度における多様な学修を日常的に側面から支援するための情報システムを構築し機能させることがこのシステムの目的である。

より具体的には、厳格厳正かつ多様な手段による成績評価とともに、大学教育の質保証という文脈で要請されること、すなわち学生が自身の学修成果の達成状況について必要なときにいつでも適切に整理、点検し、その結果をもって調整的、形成的にその後の学修を計画できる仕組みづくりに寄与することである。

実際には、一般に4年間の学士課程の経過プロセスにおいて最後の卒業判定を除けば7回存在している学期ごとの学修状況の点検機会において、学修遂行結果の状況把握を適切になしていけること、その機会ごとに事実データにそくして先々の学修計画や目標を現実的に立て、また調整していくことができるようにする。そのために functional GPA の指標とともにそれをもとにした学修状況の把握が的確にできる情報提供とガイドが可能な仕組みを構築し、提供することである。

なお、本事業で開発した学修支援情報システムは alagin と呼称している。これは Academic Learning and Achievement Guiding Information Network system を略称化した通称である。

以降、alagin がその第一バージョンで提供する学修情報について、それぞれの表示画面のサンプル（データは架空のものである）とともに紹介する。

alagin が表出する個々の学生の学修状況に関する情報

(1) 履修科目の時間割

個々の学生は学内の統合認証システムを使って、すなわち自身が学内の各種情報サービスの利用（履修登録や図書館サービスなど）に際して使っているログイン名とパスワードを入力して alagin に入る。alagin が提供する学修情報は教務で管理している情報にもとづいている。ただし、教務システムとは物理的につながっていないため、万が一 alagin のデータベースにトラブルが発生しても、成績原簿等、教務データには影響が及ぶことはない。むしろ alagin を介してそれらに接触することも不可能になっている。しかし、扱う情報の性質に鑑みて当面のところ、alagin の利用は学内 LAN の範囲に留め、学外からの利用はできない状態で運用する。

統合認証を経てあと alagin の入口画面（ポータル）は図1に示したように、その学生の当該学期に

alagin Academic Learning and Achievement Guiding Information Network system					
0130000 石田千晃 ログアウト					
履修中の時間割一覧		これまでの成績一覧		累積単位数とGPA推移	
1 2		1 2 3		1 2 3	
履修中の時間割一覧					
	月曜日 mon	火曜日 tue	水曜日 wed	木曜日 thu	金曜日 fri
1・2時限 9:00~10:30	生物学実習 生物全教員 ☺ Plone				
3・4時限 10:40~12:10			日本古典文学論講読 桜井	モダンダンステクニック (中級) I 勝部	
5・6時限 13:20~14:50		日本語構造論特殊講義 (文章語) II 染谷			
7・8時限 15:00~16:30				専門化学実験(Ⅱ) 森(義)、近藤、小川、相川、 今野、鷹野、森(寛)、森 (幸)	
9・10時限 16:40~18:10	専門化学実験(Ⅰ) 森(義)、近藤、小川、相川、 今野、鷹野、森(寛)、森 (幸)				
前集中	ピアノ合奏研究		小坂		
後集中	日本語構造論特殊講義(文章語) II		小坂		
前期不定期	オペラ研究AⅡ		森(義)、近藤、小川、相川、今野、鷹野、森(寛)、森 (幸) ☺ Plone		

図1 学修支援情報システム alagin のポータル画面 当該の学生の登録時間割

において履修登録している授業科目の時間割になる。この時間割は多くの学生がそれぞれ自分の手帳なりに控えていて、日頃繰り返し参照しているもののはずである。だが、これまではしばしばトラブルがあった。すなわち、履修登録したはず、したつもりでいたのに登録がされておらず、学期末までそのことに気づかなかった。あるいは2011年度からスタートした履修取消申告制度にもとづき、取消申告したはずのものがされていなかった等のトラブルである。このことは授業に出席していたのに試験が受けられないとか、出席していたかどうか確認できない状態にありながら試験の受験資格があるはずという申告を受けるなど、不透明な履修の発生を招き、学修環境を不健康にする種となっていた。

しかし、これらのトラブルは履修登録し、あるいは取消したあとの結果が学生自身の手帳ではなく、大学のシステムに反映された時間割として簡単かつ常態的にチェックできる仕組みがあればすべて解消する。alaginではこのシステムに入った入口において常に現況の履修登録時間割をみることになる。つまり、このチェックプロセスの仕組みが実現したわけである。

しかも、この時間割からは授業・学習支援システムである plone や moodle を使っている授業の場合はその授業の時間枠に提示されている同マークをクリックすることで当該の plone なり moodle にリンクするようになっている。

また、図2に示したように、付箋のような簡単なメモパッドが用意されていて、時間割に付随したメモを書き込み、時間割の必要な部分に貼り付けたり、消したりできるようになっている。むろん、画面のプリントアウトやコピー/ペーストも可能である。したがって、このポータルは学生から大いに重宝されることになろう。

将来的には休講情報や授業課題に関する情報が表示される機能などの追加も考えられる。



図2 時間割には適宜メモを貼り付けられる

(2) 全学のなかでの累積 GPA の位置づけ

図3は当該学生の入学から前学期までの累積 GPA(以下、とくにことわりのないかぎり GPA は f-strict GPA) のことである) について、これを在学する全学生の同値の分布において、どこに位置づけられているかをあらわしたグラフである。この分布図は横軸が GPA の値で、GPA0.0、およびそれを越える値から 4.5 までのあいだを 0.1 間隔で 46 区間に分割したそれぞれの区間の度数を示している。縦軸はそれぞれの区間に存在する人数ということになる。当該学生の累積 GPA の位置は赤色のグラフによって示されている。

この分布を構成するのは在学する全学生のデータである。そのためこのグラフには当該学生とは在学年数の異なる学生が混在していることになる。過去のデータを用いて概観した範囲では在学年数が長くなることによって累積 GPA の値が一定の傾向をもって変化する事実は認められていない。実際は学年が進むにつれて累積 GPA にあらわれる学修成果は個人差が明白になる。次第に高まるケースもあれば、低くなるケース、上下動するケース、ほぼ一定のケースなど多様である。したがって、この分布をみることによって在学年数の長さにかかわらず自身の学修成果の現況を全学的な視野のもとで見定めることができる。

(3) 学期ごとの GPA 遷移

図4のグラフは当該学生の入学期から前学期までの学期ごとにみた GPA 値の推移をあらわしている。後期の算定には通年科目の成績が加わっている。あわせて学期ごとに算定された GPA の全学平均値が(青の)■で、当該学生の所属学部での平均値が(緑の)◆で表示されている。



図3 全学のなかでの累積 GPA の位置づけ

グラフ背景上部のパープルであらわされたゾーンは表示上の面積は広いものの全学の上位およそ5%以内に入る成績優秀域にあたる。このゾーンはまだ GPA 制度が運用されていなかった 2009 年度の全学の成績状況でみた場合、GPA3.14 以上の領域にあたる。その下部のブルーであらわされた領域は全学の上位およそ20%以内に入る成績良好域にあたる。2009 年度全学の成績状況でみれば、GPA3.0 以上、3.14 未満の領域である。

反対に、グラフ背景下部のレッドであらわされたゾーンは全学の下位およそ5%に入る成績低迷域にあたる。ここは 2009 年度の成績状況でみれば GPA1.6 未満の領域をあらわしている。学修パフォーマンス上、あきらかにトラブルを抱えている領域である。その上のイエローであらわされたゾーンは下位およそ20%の領域であり、学修パフォーマンス上の警戒域とみなせる。

学期ごとの GPA 値はいうまでもなく当該学期ごとの学修パフォーマンスを示すことになるから履修する科目数のちがいや学期ごとの修学状況に敏感に反応した値を示すことになる。そのため、このグラフは学生によっては大きな変動を呈することがある。一般に GPA が総合的な学修成果指標として受けとめられ、用いられることからすれば、この学期ごとの GPA よりも次項で示す入学から現在までのすべての履修科目の学修成果をあらわした累積 GPA を一般的な GPA 指標としてみたほうがよい。

(4) 学期ごとの累積 GPA の遷移

図5は当該学生の入学から前学期までの成績を学期ごとに累積してみたいわば通算 GPA の値の推移をあらわしている。通年科目の成績は後期において算定されている。

グラフ背景については前項と類似しているが、領域区分は異なっている。まず、グラフ上部のパープルであらわされたゾーンは全在学生の累積 GPA で上位およそ2%以内に入る学修成果の最優秀域にあ

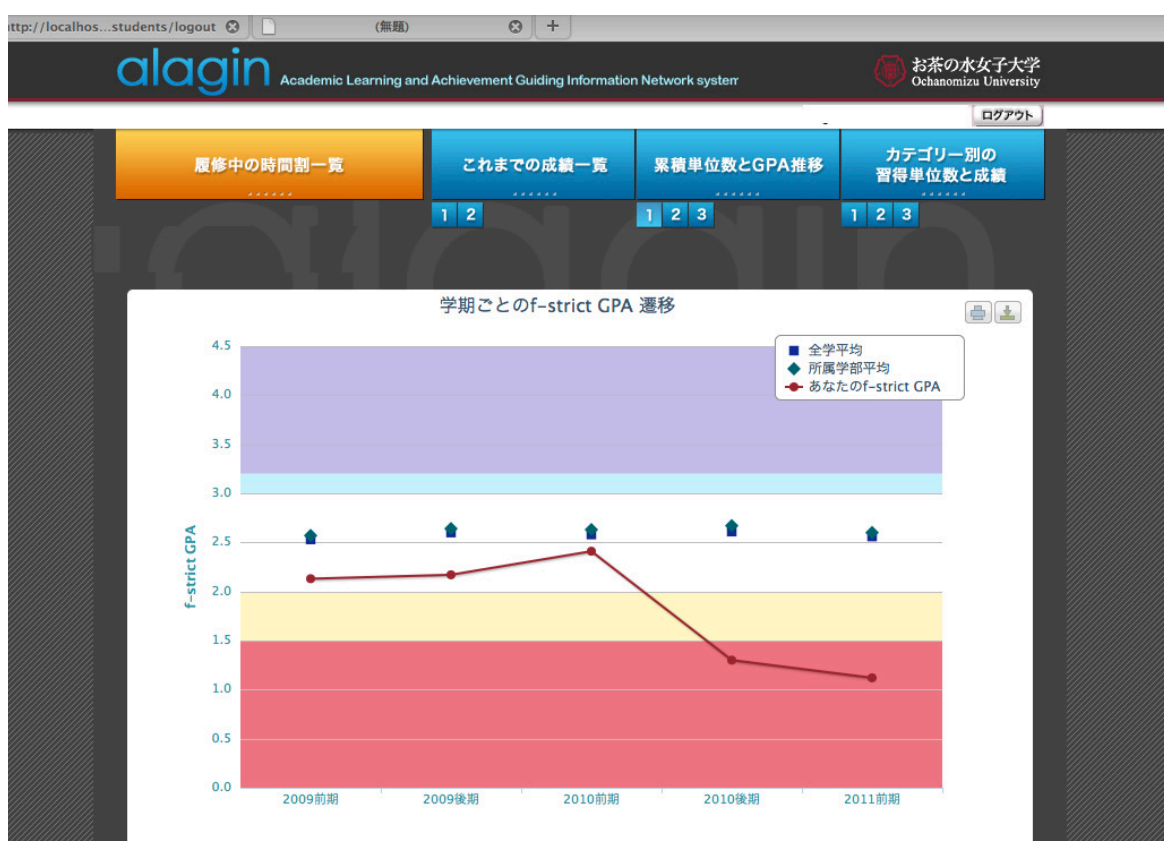


図4 学期ごとの GPA 遷移

たる。2009 年度後期時点での全在学生の累積 GPA でみれば、GPA3.19 以上の領域である。その下部のグリーンであらわされた領域は上位およそ 10% 以内に入る学修成果優秀領域である。ここは上記実績で GPA3.0 以上、3.19 未満の領域になる。さらにその領域の下部にブルーであらわされた領域は全学の上位およそ 20% 以内に入る学修成果良好領域にあたる。上記実績で GPA2.87 までの領域になる。

反対に、グラフ下部のレッドであらわされたゾーンは全在学生の累積 GPA でみれば下位およそ 2% 以内に入る成績低迷域にあたる。上記実績で GPA1.55 以下の領域であり、学修パフォーマンス上、あきらかに問題を抱えている領域である。なお、累積 GPA1.5 という値は他大学の事例 (e.g., 広島文教女子大学、北九州大学) ではこれを超えていることが卒業要件になっている場合がある。その上のピンクであらわされたゾーンは GPA2.0 未満、レッドゾーンまでの領域をあらわしている。ここは上記実績で全学の下位およそ 12% 以内のゾーンにあたる。この累積 GPA2.0 未満という基準は他大学の事例 (e.g. 一橋大学、専修大学法科大学院) では卒業要件を充足できない基準として使われている。このことから学修パフォーマンス上の警戒域とみる必要がある。さらにその領域の上部、イエローであらわされた領域は全学の下位約 20% にあたる領域をあらわしている。上記実績では GPA2.2 以下のゾーンにあたる。なお、グラフのほぼ中央を横に走る青のラインは全在学生の累積 GPA の平均値をあらわしている。

(5) 累積取得単位数の遷移

図6は当該学生の入学から前学期までの学期ごとの累積取得単位数の推移をあらわしている。横軸が学期、縦軸が単位数をあらわしている。後期の累積には通年科目の単位数が加わっている。グラフ右上方に斜行する緑の点線は学期あたり 20 単位という卒業要件単位のおおよそ 2 割 5 分～3 割増しの単

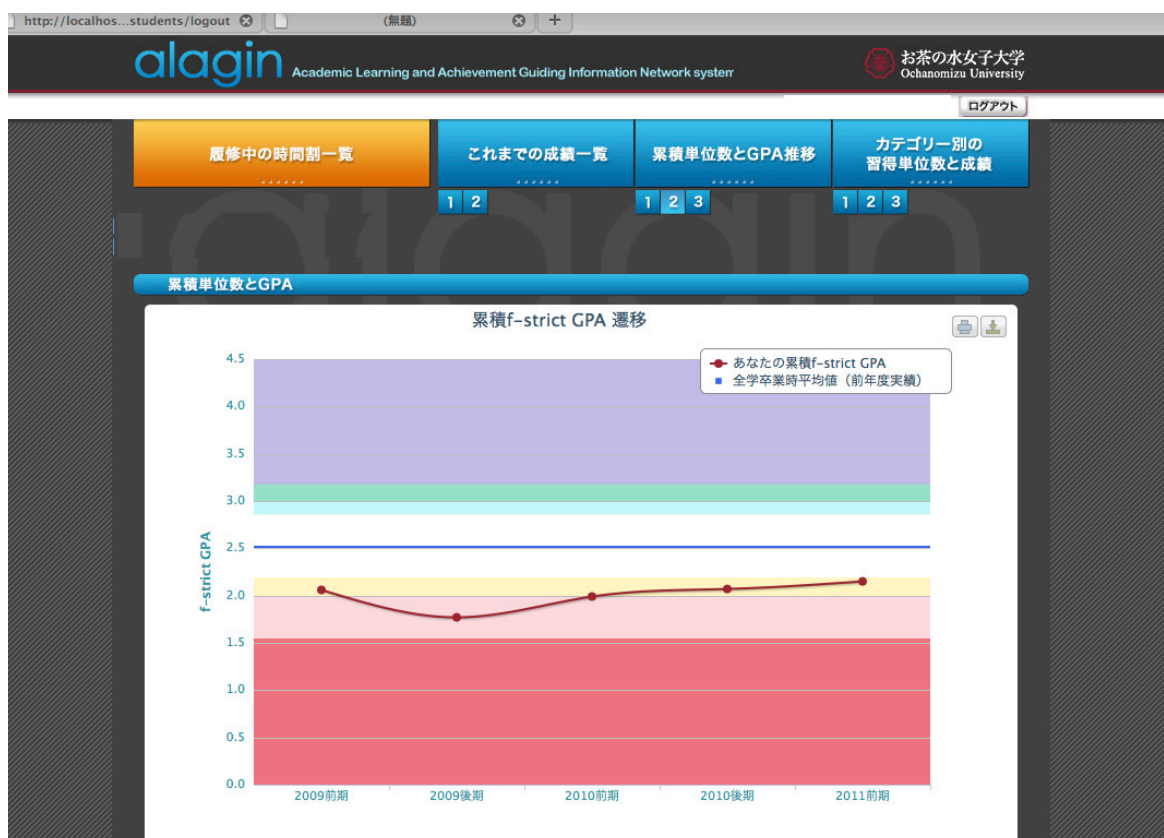


図 5 学期ごとの累積 GPA 遷移

位数を学期毎に等配分したラインで、ひとつの上限基準線をあらわしている。このラインに沿って4年間で到達する値は160単位であるから、単位の実質化の観点からすれば、これを基準とするのもいささか過大なラインである。

しかし、2009年度卒業生の実態でみると4年を上回って在学した学生や編入学で4年未満の在学で卒業した学生などを除き、また卒業要件単位数が138で他と異なる生活科学部の食物栄養学科の学生を除いた状態での取得単位数の平均値は155.7単位になっている。したがって、本学の現状では最終的に4年間でこの緑の基準点線を越えないところに至るよう単位取得していくことが単位制度の実質化という課題解決を現実的に実質化していくうえでの目安になる。むろん、これは4年間各学期に履修を平準化した場合のラインであるから、初年次や2年次においてはこれを上回することはそれが大幅なものでないかぎり許容されよう。

なお、生活科学部の食物栄養学科の学生がこの画面をみた場合はこの基準線の最終到達値は卒業要件単位数の相違に比例させて178単位になるよう表示される。ちなみに2009年度、同学科の4年間在学学生の取得単位数平均値は180.2単位であった。

(6) 現在までの成績評価の構成

図7は当該学生の入学から前学期までのレターグレードの累積構成をあらわしている。各レターグレードは100点満点で換算された原成績に対応してSが100～90点、Aが90点未満～80点、Bが80点未満～70点、Cが70点未満～60点、Dが60点未満という区間規定のもとにある。f-strict GPはその素点に対応して $GP = (SS - 55) / 10$ 、ただし $GP < 0.5$ のとき $GP = 0$ という算定条件で求められるから、



図6 累積取得単位数の遷移

Sの範囲には4.5～3.5、Aには3.5未満～2.5、Bには2.5未満～1.5、Cには1.5未満～0.5、Dには0.0のGPが存在することになる。なお、GPに換算されない認定科目の数はNとして、このグラフの表示時点で保留、未定となっている科目数は「その他」として表示している。

ちなみに本学2009年度の全学生を対象にみたとき、各評価グレードの構成割合はSが4.2%、Aが52.8%、Bが19.5%、Cが8.0%、Dが2.4%、Nが2.3%、その他が10.8%になっている。

参考までにこうした成績分布が公開されている他大学の事例を2つあげておく。レターグレード表記(秀～不可など)を本学の形式にあわせて表記すれば、北海道大学の全学教育科目における2009年度実績ではSが13.1%、Aが33.1%、Bが33.0%、Cが13.6%、Dが7.2%となっている。また、同志社大学の一年次生2005年度実績では概数でSが15%、Aが27%、Bが25%、Cが17%、Dが13%、その他が3%になっている。むろんこれら2例を標準とみるゆえんはないし、これらは全学データではない。だが、本学が最上位の評価等級において量的に厳しすぎる反面、それ以下の評価においては甘く、とりわけA評価が半数を超えてあきらかに過多になっているようすがうかがえる。

ところが、これはfGPAの導入によって、別項で述べたようにレターグレードによる概括的なカテゴリ評価による表面的な結果であることがあきらかになった。その内実を原成績の評価を反映したGPAでみてみれば、A評価の内部においてS評価に近い評価ほど大幅に少なく、B評価に近い評価ほど多くなるという妥当な傾斜評価がなされていることが認められた。すなわち、全体の成績評価分布としてはレターグレードにみられるような極端な偏りはないことが確認できた。これは本事業で得られた代表的な成果の一つであった。



図 7 現在の成績のレターグレード構成



図 8 カラーコードベンチマーク別のグレードポイント平均値

(7) カラーコードベンチマーク別の GPM

図 8 は当該学生が履修した科目についてカラーコードベンチマーク別に GP を単純に算術平均した GPM(Grade Point Mean)の値をバーグラフで表示している画面である。あわせてそれぞれのカラーコード別に当該履修者が履修した全科目の GPC(Grade Point Class mean) についての平均値がドットで表示されている。両値の比較によってカラーコードベンチマーク別に自身のパフォーマンスの具合を検討することができる。

このカラーコードベンチマーク別のほか、以下にみるように科目区分別、選択プログラム別等、一定の科目カテゴリー別にパフォーマンスを比較する際には、GPA のようにそれぞれの科目の単位数を成績に關与させる必要はない(たとえば、ある科目区分のなかに入る科目の全履修者の平均 GP を知りたいとき、異なる単位数の科目が混在していてもそれらの単位数の違いによる重みづけは必要ない)ので、単純に GP の算術平均値である GPM を用いて比較している。

※ GPC: Grade Point Class mean は、ある科目についてその全履修生のグレードポイント(不合格の際の 0 ポイントを含む)の総計を履修生数で除した GP の算術平均値のことである。したがって、この値は GPA とは異なり、単位数は關与していない。個人の履修単位数に反映された学修時間を考慮して学生個人の総合的な学修パフォーマンスを評価する GPA とは違い、科目ごとの成績評価を比較したり、一定の科目カテゴリー内の成績評価の平均値などをみる場合は、原成績がそのまま反映された GP の値だけを用いたほうがよい。GPC を Grade Point Class average と表現することもあるが、Grade Point Average は単位数を關与させた加重平均値として国際的にも一般化しているから、Grade Point の単純な算術平均値についてはそれと区別する意味で Mean の文字を用いることが誤解もなく望ましいだろう。したがって、個人の GPM(Grade Point Mean) といえ、全履修科目あるいは一定の科目カテゴリーにおける当人の f-strict GP の算術平均値を指すことになる。

(8) 科目区分別の GPM

図 9 は当該学生が履修した科目について、コア科目・専門科目・教職科目・その他科目区分別に GPM をバーグラフで表示している。あわせてそれぞれの科目区分別に当該履修者が履修した全科目についての GPC(Grade Point Class mean) の平均値がドットで表示されている。両値の比較によって科目区分別に自身のパフォーマンスの具合を検討することができる。

(9) 履修科目別の GP とその科目の GPC

図 10 には当該学生が履修したすべての科目について、履修年度、単位数、当該学生のレターグレード、f-strict GP、f-general GP、およびそれぞれの科目についての GPC と GP の最大値から最小値までのレンジが表示されている。GP レンジと GPC は表中にミニ線分グラフとグラフ上の垂線であらわれ、当該学生の取得した GP の位置がそのグラフ上に緑の逆三角形でポイントングされている。成績が GP3.0 以上で優良のときこのポインターは青表示になり、GP1.5 未満で低迷しているときポインターは黄色表示になる。また、不合格で GP0 のときはポインターがなく、グラフ全体が灰色表示になる。

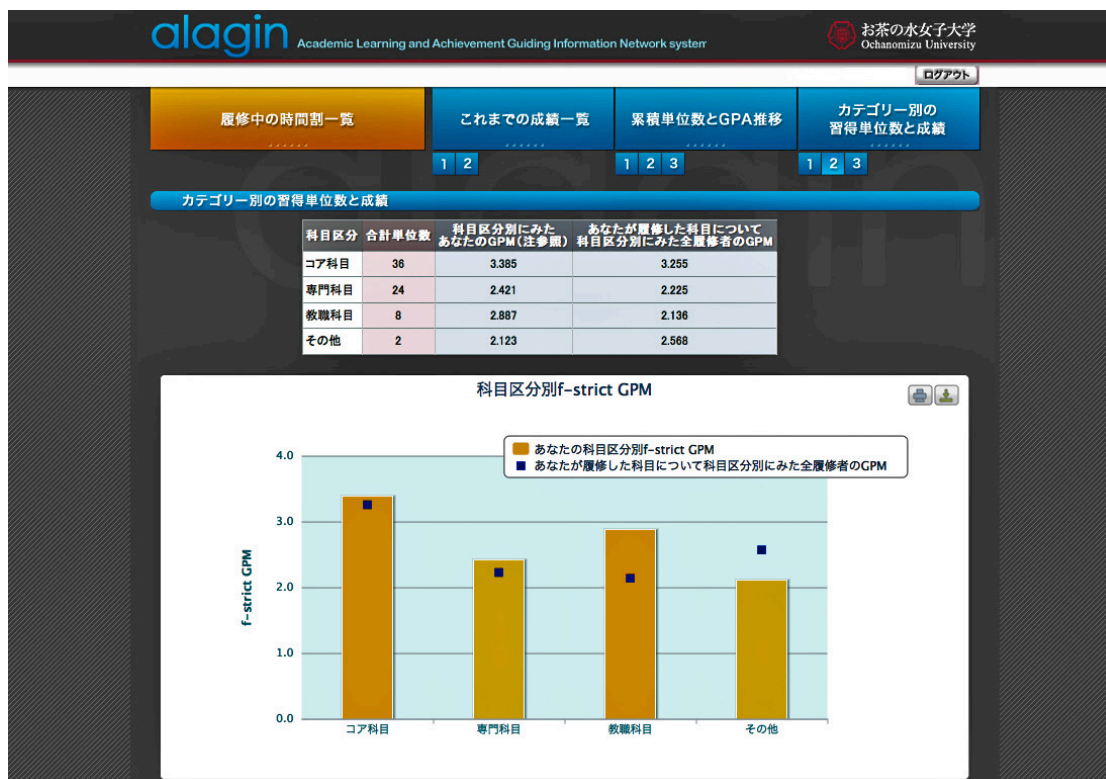


図 9 現在の成績のレターグレード構成



図 10 当該学生が履修したすべての科目の GP やその科目の GPC、GP レンジャー

当然のことながら、認定科目、成績保留・未定科目の場合は GP 表示やグラフ表示が表出されない。

※ f-general GP は Grade Point の合格範囲を 4.0~1.0 に定めている大学との通用性に配慮して f-strict GP の 4.0 以上を一律 4.0 に、1.0 以下、0.5 以上を一律 1.0 に調整した GP の値である。したがって、f-general GP では GP 両極部位 0.5 の範囲は値が丸められるが、4.0 ~ 1.0 の範囲については原成績の評定比率は維持される。他大学への留学などに際して相手機関から GPA の記録提出が求められる場合などには、相手先の GP 範囲などに照らして適宜 f-general GP(A) の値が用いられることになろう。一方、本学内で学修計画立案の指導や支援、報奨、選抜などの機会に GP や GPA を利用していく際には、GP 全域について原成績の評定比率が維持され厳格な成績評価の意に沿っている f-strict GP(A) が用いられる。